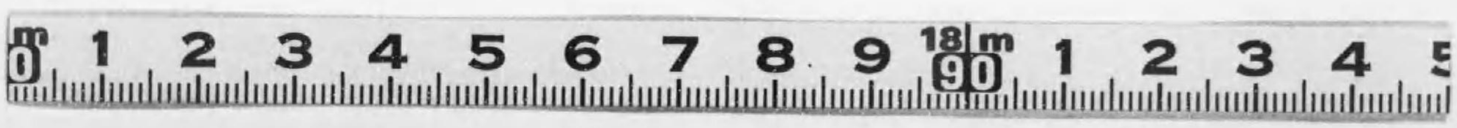
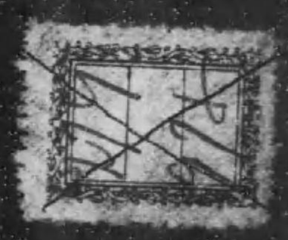

m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 m 90 1 2 3 4 5

賀



特108
72/1

性的知識全

大正
8. 7. 22
内交

序

吾等は長い間性慾に關することは之を隱蔽して祕密の裡に葬つて置くのが一種の社會道德であるといふ風に考へてゐた。是に關する種々の問題が社會學上から、醫學上から、又教育學上から嚴密に研究されるやうになつたのは極く最近のことに屬する。而して其等研究の歩が進むに從つて、性慾現象が如何に吾等人類の生存に深大な影響を及ぼすものであるかといふことが解つて

來た。殊に最近に至つては、社會學上乃至教育學上から此方面に關する研究は重大な意味深いものと見做されるに至つた。現代に於ける社會現象は種々樣々なる姿を採つて現はれてゐる。從つて是等の現象を一々仔細に考究吟味して區別することは素より困難の事業であるが、其等の根底に可なり深く性慾現象が潛んでゐることは少しく此方面に眼を向けてゐる者に取つては疑ふべからざる事實である。從つて性慾現象は今日では立派な社會現象の一つとして生きた社會學

の研究者から敬重されてゐる。

既に性慾現象が社會現象の一つで、個人的にも將た又社會的にも吾等の生活に甚大なる影響を及ぼすものである以上、之を唯だ單なる現象として放擲して之が研究を怠り、之を其儘に隱蔽して深い沈默を守つてゐるのは、確かに昔の人々が之に就いて兎や角言ふことが罪惡である、不道德であると思つてゐた以上に、今日では社會的不德義であり、罪惡であると言はねばならぬ。流石に今日の社會では、歐米は勿論日本などでも、花柳病に

關する書籍の出版や性慾問題に關する眞面目な議論を社會的罪惡と考へるものは識者の中には無いやうである。尤も舊式な考へに囚はれてゐる所謂道德家などは或はまださう考へてゐるかも知れないが。然し一般的の傾向は之をどうすることも出來ない。時代は確かに變つて來た。人類の幸福は、性的關係から起つて來る或種の害惡を放擲して置いてはならない、一般議論から遠ざけて置いてはならないといふことを要求してゐる。

以上の如き意味から、歐米に於ては性慾研究に關する出版物が近年非常に多くなつて來た。是は一面に於て確かに好い傾向である。蓋し知らずにゐた爲めに不幸に陷つてゐた者が知つた爲めにそれから救はれるといふことが有り得るからである。然し此傾向は一面に於て惡い影響を一般社會に及ぼしてゐることをも吾等は認めなければならぬ。卽ち出版される書物が單なる好奇心に訴へて刺戟を唆り、以て出版者及び著者の利益を得んとする目的に依つて作られてゐるや

うな場合、若しくは餘りに學究的であり衒學的である爲めに到底一般人には理解されないといふやうな場合である。前者に於ては寧ろ惡結果を齎し、後者にあつては、有れども無きに似たる有樣であるから、何れにしても人類生活の進展を圖る上には效果がないと言はなければならぬ。

本書の著者ウィリアム・ジェー・ロビンソン氏は夙に此方面に深い造詣を有し、而して廣く性慾問題に關する書物を涉獵して、以上に述べたやうな不滿を痛切に感じたのであつた。本書『性的知識』は

實に此不滿を充たさんが爲めに著者が遠大なる抱負を以て書いたものに外ならない。

著者は亞米利加紐育なるブロンクス病院の生殖器及び皮膚科々長で、性慾問題に關する實際の知識は到底他人の追從を許さぬものがあると言ひ、又、性慾研究を社會學的に醫學的に試み且、常に眞面目な社會生活の指導者を以て任じてゐる雜誌『批評家と指導』の主筆である爲めに、其見解は飽くまでも平明且つ有效なものであると言はれて居る。本原書は『男子に對する性的知識』と『女子に

對する性的知識』との二部から成つてゐる、其主眼は男女が最少限度に於て性慾に關して知つて置かなければならぬ知識を最も平易に簡單に記述して世の父兄及び青年男女の參考に資せんとするにある。

世間に流布されてゐる此種の出版物は概して性的心理學、性的生理學及び性的衞生學の知識を缺いたものが多い。これは歐米に於ても同じことである。偶さういふ方面の知識が披瀝されてゐるかと思ふと、それは學究的であつて、一般社會

の民衆には近づき難いものになつてゐる。又それと反對に通俗なるものになると徒らに好奇心を刺戟して、之を讀むものに讀まざるよりは以上の惡影響を及ぼすやうなものがある。更に又此種の著述には、著者が世間を憚るといつたやうな態度が主になつて、事實の眞相を端的に提供しないで、或は實際のことを曲げたり、又無理に美しく飾り立てたりしてゐるものもある。

然るに本書の著者はさういふ學究的な態度、卑俗な態度、僞善的な態度を悉く捨て去つて、直に正

直な性慾問題の著書を提供することを心掛けたと見えて、本書の如きは僞らざる科學的な性的知識に關する著述であると言つてよい。男女生殖器の解剖及び生理、花柳病と其豫防、男女の性慾本能の發現等に關する事柄を取扱つた、正直にして、何等偏見のない、眞實な、科學的の書物といふ一點に本書の意義と價値とはかゝつてゐる。彼の說いてゐる所は、全く自由である、眞實である。從つて或種の道德觀に囚はれた性的教育學者などの說とは大いに異つた意見などもある。然しそれ

は彼が殊更に異を樹てるのではなく、事の眞實を明白にして、性的生活の健全を計り、以て社會を善導しようとする一種の氣魄が熱烈である爲めに外ならない。本協會に於ては、さきにアウグスト・フォーレルの『性慾研究』を出版し、その研究の深淵、その態度の嚴肅、その取材の廣汎なる點に於て、此方面のオーソリティーと認められ、今日尙ほ多くの熟讀者を有してゐるが、本書には自から別種の問題、或は新解釋に基く研究等が多く提供されてゐるから、是亦一般人士の一讀を要すべきものであ

らうと信ずる。

大正八年六月十九日

法學博士 浮田和民

例言

本書は米國紐育なるブロンクス病院の生殖器及び皮膚科々長にして、且つ社會の廓清と善導とを標榜する雜誌『批評家と指導』の主筆なるウィリアム・ジェー・ロビンソン氏の近著『男子の爲めの性的知識』("Sex Knowledge for Men"-1916) 及び『女子の爲めの性的知識』("Sex Knowledge for Women"-1917) を意譯して、一卷に纒めたものである。元より徒らに知識を誇るとか、又一般人士の好奇心に訴へるとかいふ樣な動機から書かれたものではない。性慾問題に關する書物は近年著しく增加して來たが、眞に人々が讀み且つ味つて有益なるものは極めて尠ない故、是非此不滿を充たすに足る快著に筆を執られたしとの彼の追從者の切なる勸告に依つて、著者が執筆することを決し、且つ著者自身、最少限度に於て青年男女及び一般の父兄が性慾に關して知らねばならぬ知識を普及させようといふ意氣込みを以て公けにしたものであるから、其說く所は平易簡明で、而かも多くの教訓を含んでゐる。

斯かる方面の書物は動もすれば卑俗に流れ易いものである。然るに本書には毫もさういふ跡が認められない。是れ全く著者の人格的崇高と、社會人類の安寧及び幸福を圖らんとする熱烈なる氣魄との存する爲めであらう。尙此種の書物になると、浮田博士も序文で言はれてゐる通りに、僞善的な所があつたり、妥協的な所があつたりして、容易に事實の眞相を披瀝するに至らないものであるが、本書にはさういふ點も見當らない。著者の立場は『妥協を排す』といふ一語につきてゐる。氏は其原序に於て『本書にして若し余の僞らざる眞實の意見を吐露するを得ずとせば、之を書かざるべしと獨語した』と言つてゐる。本書に關する著者の自信乃至抱負が如何に深く强いものであるかは此一語に依つても知ることが出來よう。一方に於ては人類の安寧と幸福とを要望する熱烈な社會廓淸家であり、他方では學理的にも實際的にも性慾問題に關する知識の豐富なる醫學者である人の手になつたといふ點に、世間一般に流布されてゐる、徒らに好奇心の對象となるが如き通俗卑近の書物とは全然異つた意義と價値とが存してゐる。

尙ほ氏は此方面に關する造詣深く、今日までに公にされた著述も尠くなく、今其主なるものを擧げれば左の通りである。

"A Practical Treatise on the Causes, Symptoms and Treatment of Sexual Impotence and other Sexual Disorders in Men and Women."
"Treatment of Gonorrhea and its Complications in Men and Women."
"Sexual Problems of To-day."
"Woman: Her Sex and Love Life."
"Never Told Tales."
"Stories of Love and Life."
"Limitation of Offspring by the Prevention of Conception."
"Sex Morality-Past, Present and Future."
"Practical Eugenics: For Means of Improving the Human Race."

實際氏の活動には目覺しいものがある。今尙ほ其活動を續けて、亞米利加に於て此方面に於ける研究の第一人者を以て目されてゐる。本協會は斯かる眞面目にして篤學なる而かも社會指導の任に當つてゐられる著者

のものを茲に譯述し得たことを、著者に向つて深く感謝する、次第である。

大正八年六月

大日本文明協會識

原　序

幾世紀の間、性に關する一切の事は、深い沈默に支配されて來た。從つて性慾の常態と變態との現象は、共に否定され、陰蔽され、而して生殖器の疾病は、恰も存在しないものゝやうに取扱はれなければならなかつた。新聞雜誌に散見する花柳病の說明、性慾問題の眞面目な議論でさへも、社會上法律上の非難を蒙つた。其結果、世人は、性的知識の領域を開拓しようとする學者に對して、冷淡な態度を執つて來たのである。

漸く、十年以前に於いて、多少の變化が現はれ始めた。人類の幸福上、性慾關係から生ずる或る禍害に關して、最早輿論の默視することを許さない傾向が見え始めたのである。而して各都市に種々の協會が設けられ、性慾問題に關する知識を世人に與へようとした。わけても恐ろしい花柳病の蹂躪から免れることを、世人に警告しようと試みた。性慾問題に觸れた書物、青年に性的知識を普及する奇特な目的の册子などが、相次いで現はれた。

私は、それらの書物を、悉く通讀して見た。然し是等の書物は、慥かに他に良書を有しない人々にとつては、滿足なものであり、眞の知識の缺乏を充たして呉れるものであらうが、云はゞ單に無いよりは增しであるといふ程度に過ぎない。而して甚だ遺憾ながら、未だ私は不幸にして、全く同意の出來る著述を見出すことが出來ないのである。

此種の書物は、二つに分類することが出來る。拔け目のない著者と出版屋(時代の特殊な心理を鋭感に嗅ぐ能力を持つて居る)とが共同して、金儲の爲めにする商賣的のものが、其一つである。今一つは、著書が、知識を分配しようとか、青年や老人を危險に落すまいとかいふ眞劍な目的の下に出版された眞面目な書物である。然し、金儲けのための書物も眞面目な書物も、共通した缺點を持つて居る。それは、すべて書かれた事柄が、嘔吐を催すほど露骨で、悪い誇張と賤しい虚僞とに充されて居ることであつて、而かも著者は憐れむべき程、性的生理學、病理學などに關する知識を持つて居ないのである。――過去二十五年間に、此方面の進歩した知識全部を著者が知らない

のかとさへ疑はれる。――而して、何處に如何なる頁にも、偏見と虚僞とが充ちて居るのである。或者は高尚な目的の爲めに、或者は書物の販賣を助ける爲めに、それ々々間違つた著述を出版して居るのである。

現代の性的書物に就いて書いた此私の意見は、單に私一人の考へるところではない。多くの世間の父親や、母親や、青年や、少女達は、私に向つて屢、現在流行して居るかうした性慾上の書物に對する不滿や、嫌惡をさへも書き送つて來た。最近五六年間に、私は「本當に正直な」性的書物を書くやうにとの要求を、幾度となく受けた。然し、たま々々手許に他の重要な仕事を控へて居た爲めに、諸君の希望を充すことが出來なかつた。然るに一方諸君の要求は段々繁く嚴しくなつた、それに加へて、批評家や教育者側から、始終最良の性的書物は何であるかといふ質問を受ける事實がある。而かも最良の書物はないのだから(一方比較的には良いといふ書物はある、然しそれ自身で良いといふ書物はない)かうした質問には、何とも答へることが出來ない。茲に私は、其二つの理由に迫られて、本當に正直な性的知識を說く科學

的著述に筆を執らうと思つたのである。

此書物は日曜學校の教科書に採用されようとしては居ない、又各種衛生協會から指定されもしないであらう。何故といふと、この書は絶對に眞理だからであり、著者自らは、ある偏見が如何に根柢の深いものでも、それが偏見ならば遠慮なく斥けるからである。而して誤謬、無智、神經化された因襲などに妥協することを、率直に斥けるからである。

「妥協しない！」これが最初より最後までを貫く私の標榜語である。私は此書物が、眞實を現はし得なかつたならば、書くべきでなかつたといふことを自ら承知してゐる。而して今茲に書き終ることが出來たのだから、此書物は正に私の懷く眞實を披瀝したものといつてよい。但し、此書物は基礎的のものである。從つてあらゆる事を盡して居ないが、少くとも書かれた事柄丈は間違のない眞理である。

此書物が、今日までに世間に現はれた多くの書物に充滿して居る誤謬と偏見とを、多少でも除くに役立つならば、著者の喜悅は之に過ぎない。

ヂェー・ロビンソン

目次

前篇　男子の爲めの性的知識

第一章　緒言……一
第二章　生殖器の解剖と生理……六
第三章　男性生殖器……八
第四章　生殖器の生理……一三
第五章　春機發動期……二〇
第六章　手淫……二四
第七章　手淫癖の豫防……三五

第八章　夢精……一四一
第九章　性的不能（性的能力の微弱をも含む）……一四八
第十章　性的神經衰弱……一五九
第十一章　生殖不能……七一
第十二章　花柳病……七四
第十三章　花柳病豫防……七六
第十四章　痳病……九〇
第十五章　黴毒……九七
第十六章　遺傳黴毒……一〇八
第十七章　黴毒の處置……一一四

第十八章　軟性下疳……一二一
第十九章　花柳病と結婚……一二四
第二十章　花柳病と醫師……一二九
第二十一章　生殖器の小缺陷……一三四
第二十二章　生殖器の疱疹……一三八
第二十三章　急性攝護腺炎……一四二
第二十四章　慢性攝護腺炎……一四五
第二十五章　攝護腺の膨脹……一四八
第二十六章　靜脈腫……一五一
第二十七章　副精巢炎……一五四

第二十八章　尿道狹窄……一五八
第二十九章　僂麻質斯……一六〇
第三十章　眼痳……一六一
第三十一章　禁欲……一六四
第三十二章　結婚……一七一
第三十三章　賣淫……一八〇
第三十四章　性欲教育……一八三

後篇　女子の爲めの性的知識……一九三

第一章　緒言……一九三
第二章　女子生殖器の解剖……一九九

第三章　女子生殖器の生理……二〇五
第四章　生殖本能……二一二
第五章　春機發動期……二一六
第六章　月經……二二一
第七章　月經異狀……二二四
第八章　月經時の衞生……二二七
第九章　受胎……二三一
第十章　姙娠……二三五
第十一章　姙娠の異狀……二三八
第十二章　醫師の必要……二四六

第十三章　胎兒の成長……二四九
第十四章　胎盤と臍帶……二五二
第十五章　哺乳……二五五
第十六章　流產と墮胎……二五九
第十七章　分娩前の注意……二六一
第十八章　不姙症……二六五
第十九章　月經終止……二六八
第二十章　手淫……二七三
第二十一章　白帶下……二八一
第二十二章　花柳病……二八七

第二十三章　花柳病の範圍……二八九
第二十四章　痳病……二九七
第二十五章　少女の感染……三〇三
第二十六章　黴毒……三〇七
第二十七章　花柳病の治療……三一三
第二十八章　花柳病豫防……三一五
第二十九章　姙娠及び分娩の制限……三一八
第三十章　新婚の夫婦に……三二七

目次 終

性的知識

前篇　男子の爲めの性的知識

第一章　緒言

私が此書物で諸君に語らうとする事柄は、諸君にとつて最も重大なことである。諸君にとつて重大な事柄であるといふのは、決して私が誇張して居るのではない。私は諸君の一身にとつても、諸君の近親にとつても、又廣く一般世人にとつても、これ程重大な問題はないと信じて居る。

茲に述べた事實に關して無知であることは、多くの青年の生命にも價することであり、多くの前途を持つた生涯を亡ぼすことであり、多くの疾病と缺損とを導くことであり、計り知れない絶望的の災害と不幸とを招くこと

である。

今私は諸君の性の性質、生殖器、性慾などに就いて話さうと思ふ。これまで諸君が性的問題に就いて、何かの書物を讀んで居るかどうか、私は知らない。若し何も讀んで居ないならば――居ない方がそれ丈けいゝ。諸君が嘗て此種の讀書から得た知識は、誤つてはゐないであらうが、兎に角それは不完全であるばかりでなく、偏狹である。一口にへば全然此種の知識を持つて居ない方がいゝのである。

序文でも言つて置いたが、現在青年の讀まうとする性的問題に關する著述は、二種類に分類することが出來る。一つは廣告的に「只だ人に見せる爲めに飾る」山師の出版屋と法螺吹きの醫者とがする仕事である。こんな著述は害があつて益はない。虚僞と誇張と馬鹿々々しい誤謬と丈けがあるに過ぎない。かゝる著者は、何を書かうと、どんな誤謬を述べようと、全然責任を負つてゐない。彼等の目的は、單に金錢の上に出ないのである、而かもかうした著述は、世に廣く行はれて少年や青年に害を與へつゝある。

今一つは、高尚な性質のものであつて、其目的は讀者を刺激して金錢を儲けようとするのではない。青年を、善と眞とによつて守らうとするのが目的である。目的は手段を選ばずといふ人がある。此種類の著者にとつては、少年や青年を、善と眞とによつて守らうとする目的が重大である爲め、誇張したり、卑しい間違を述べたりしても差支へない、と考へられるかもしれない。勿論かうした誇張、誤謬などは、熟慮した結果から述べられるものではないから、それは當然著者達の無智に罪を歸せねばならぬのである。

此二種の著述は、其目的こそ異つて居るが、其手段は同一と言つて惡ければ似通つて居る。即ちどちらも、恐怖心を呼び起さうとして居る。而して私は此人を嚇すといふことが良くないことであり、恐怖の手段を用ゆることが、教育の武器としても正しくないことであると思つて居る。これは、單に惡いばかりではなく、精神と性格とを傷けしめ、本來の目的を達せしめない場合も屢ある。否、時とすると、人間を再び遁れることの出來ぬどん底に突き落すことさへある。私は玆で說教したくはない、――私は說教を好ま

ないから諸君を端正にするやうに嚇かさうともしない。たゞ眞理をありのまゝに述べて、諸君の選擇に委せるつもりである。

長年の間、私は數千の青年の群に信頼を受けて來た。彼等は柔順に私の忠言に賴つた。それは彼等がよく私の態度を知つて居たからである。私は、習慣、因襲、迷信、定說などに反對してまでも、何等の偏見に囚はれずに、眞理は飽くまで眞理として說いた。此點を幸に知つて吳れた。而して本書を讀む諸君も亦、玆に說かれることが凡て眞理であると忽ち信ずるに至るだらうと思ふ。然し私は諸君に、眞理の全部を示さうと約束はしない。理由は第一に、此基礎的の書物としての制限が、それを許されないし、第二に恐らく諸君は、人間の性に關する驚くべき複雜性を理解するだけの準備をして居ないであらう。そこで唯だ私は、玆に說くことは凡て世界で最も偉大な性慾學者の說に從つて述べた科學的眞理だといふことを、諸君に約束して置かう。性慾教育は、徐々に進まなければならぬ。諸君が此書物を了解し終つたならば、次の一層深い、一層詳しい著述に就く準備をしたらいゝであらう。

私は、本書に含まれる嚴密な眞理を餘りに力說した。それが爲めに、私の意見では他の性的知識を說いた書物は、全部非眞理だと言ふやうな推論を下す人があるかもしれない。然し吾々は、宗教的偏見にも囚はれず、因襲的偏見にも囚はれずに性慾問題を取扱つた偉大な著者を持たないわけではない。それにはハベロック・エリス、ブロッチ、マアキウス、モール、オイレンブルヒ、フォーレル、ヒルシュフェルド、などの名を擧ぐれは澤山である。然し、かうした人人の著述は、充分に發達した教養ある人々にだけ意味がある。而して一般の青年には餘りに深遠と難解とのため、却つて無意味であるに違ひない。それ故に、本書こそは、一般人の爲めに書かれた科學的眞理の最初の試みである。

第二章　生殖器の解剖と生理

凡べて生物界は、二個の性に分類さる。男性と女性、雄性と雌性とである。此區別は、動物界にあるばかりではない、植物界にも見られるのである。雄性植物と雌性植物との區別を、吾々は明瞭に見ることが出來ないが、動物界になると、其雄雌の區別が明瞭になり、而かも高等になればなる程、著しくなる。其最も發達した人間界では、男女の區別が、其一生を支配するだけの力を持つて居る。意識的にでも無意識的にでも、人間は凡て各自の性の爲めに、思想や感情や行爲などにも、著しく影響を受けるのである。

人間の性的本能と動物の性的本能との區別は、量――卽ち强弱にあるばかりでなく、性質にもある。其區別は度に於て異ると同時に、類に於ても異つてゐる。動物にあつては、性慾は、種族保存の爲めの生殖に向つて實際的に働くが、然し人間にあつては、それよりも高い價値を持ち、廣い意義を持つて居る。而して尙ほ種族を保存するといふ以外に、高尙な個人的及び社會

的價値をも持つて居る。何故ならば、これは愛の源泉であり、愛は、個人の精神的發達及び社會の建設と發展とに最も重要な役目を演ずるものだからである。人間の性慾本能を、單に生殖にありと限定することは、それを小さくするものであり、賤しくするものであり、更に近代男女の心理を攪むに全然失敗を示すものである。

各種の植物乃至動物が繁殖する無數の方法を研究して見ることは、極めて興味の深いことである。アミーバから人間に至るまでの生物は、凡て驚異と至美とに滿たされて居る。植物界に於ても亦同樣である。昆蟲、魚類、馬類、或は高等動物等などが共に棲み、子を產み、それを育てるには、どうするか――これを研究すれば實に驚くべきものがある。然し此書物ではそれ等を詳しく調査するだけの餘地がない、それ故にそれを他日に讓り、玆では兩性の研究だけに止める。

第三章　男性生殖器

男性生殖器は、內外の二部に分類される。外部生殖器は、體外に露出して居るものであつて、陰莖と精巢(睾丸)とである。內部生殖器は、攝護腺と精囊とである。これらの內最も大切なものは精巢であつて、これは精子を生ずる器官である。此精子が無ければ、子供の生ずることもないし、又男性に特有な性格を生ずることもない。卽ち精巢がなければ、男性が男性でなくなるのである。先づ精巢から研究しよう。

精巢(睾丸)。精巢は一對の卵狀腺體器官であつて、陰囊によつて包まれて居る。大きさは、平均一吋乃至一吋半から二吋までの長さと、一吋の廣さと、一吋乃至一吋四分の一の厚さを持つてゐる。重量は、四分の三オンスである。陰囊中にあるこの一對の精巢は、各自分離して居るが、何れも結組織に依つて相連結する。

精巢は非常に敏感な器官であつて、これにもし一擊でも加へるならば、忽ち氣絕して仕舞ふ。打擊や墜落などの爲めに精巢が炎症を起せば、やがて將來の作用に影響を來すのである。さうした場合には、精巢が精子を生ずる能力を失ひ、從つて子供を得ることが出來なくなる。かうした例は、子供時代に於いて精巢に、强い打擊を受けた多くの人々から屢、聞くことである。元來精巢は、生殖器中、最も重大な器官であるにも拘はらず、何等の保護もなく、體外に露出されて居る。此事實は造化の大誤謬とも言ふべきであつて、女性の卵巢と同樣、深く體內に收めて充分の保護を加ふべきであつた。

精巢は固體ではなく、幾多の區分を有してゐる。其各區分は、精液を運ぶ管を有してゐる。其管は副精巢に連り、副精巢は輸精管に連る。而して更に其輸精管が、精液を精囊中に導くのである。副睾巢は精巢の上背部にあつて、頭部、腹部、尾部の三部から成る。精巢內には、更に輸精管の外に靜脈血管、神經、淋巴腺などが走つて居る。靜脈は時として腫脹して所謂靜脈腫を生ずるが、それに就いては後章に詳しく說くことにする。

男性の最も特殊な器官たる陰莖は、交接の器官であると同時に、排尿の器官である。陰莖は三部に分類される、陰莖脚と陰體と龜頭とである。身體に接して居る陰莖の部分が陰莖脚で、先端が龜頭である。龜頭の上端は稍〻尖つて、中央に尿道口が開いて居る。尿道口の周圍の緣は龜頭冠である。龜頭と陰莖脚との距離が陰體と呼び、陰體と龜頭冠との結合部を龜頭頸と呼んでゐる。陰體を被覆する膜を陰皮と言ふ。陰皮は二重に成り、前端は襞積狀をして龜頭をも包んで居る。此部分を包皮と稱してゐる。然し直接龜頭に固着して居ないから、自由に反轉することが出來る。古來の史實に見える割禮とは、此包皮を截去することである。

陰莖を解剖すると、三體に區分することが出來る。內、二體は上部にあつて空洞體と呼ばれ、他の一體は下部にあつて海綿體と呼ばれ、空洞體の造つた溝を充たして居る。尿道の通じて居るのは此部分である。陰莖は、常態にあつては柔軟であるが、性慾的の刺戟に會へば、忽ち擴大緊張する。此作用を勃起作用と呼んでゐる。陰莖の柔軟狀態の時は、平均長さ一吋から六

吋までに過ぎないが、勃起狀態の時は四吋から九吋に至る。然し偉大な陰莖と精巢とを持つた人間が、必ずしも性的精力を多分に有するわけではない。生殖器だけが發達して精力のこれに伴はない實例、及び其反對の實例を私は屢〻見て居る。

龜頭は全部海綿體で組織されてゐる。龜頭冠に開いた尿道は、排尿の通路であると同時に精液を外界に運ぶ通路となつて居る。それ故に生殖器官中の重要の役目を負ふものとして注意されねばならない。

精巢から精液を輸精管が運ぶことは既に述べた。然しこれは直接尿道に運ばれるのでなく、先づ最初には精囊中に運ばれて、精液の必要が生ずる時まで其處に貯藏される。精囊には、輸精管に相通ずる射精管がある。射精管は、交接に際して、尿道に精液を射出する。精囊は、單に精液の貯藏所となるばかりでなく、又一種の分泌物を生じ、それを精液中に混入する。精囊の長さは約一吋半乃至二吋、位置は攝護腺の上にあつて、直腸に諸君が指を觸れて見れば容易に感知することが出來る。

以上で大體の知識、精巣と其附屬物、輸精管、精嚢、陰莖、尿道などに就いての簡單な知識を得たことゝ思ふ。然し此處に尙ほ重大な器官が一箇殘つて居る、卽ち攝護腺がこれである。

攝護腺。攝護腺は重要な小器管であるが、其重要な役目を認められたのは極めて最近のことである。直腸に指を當てゝ見れば明らかに感知することが出來る。七葉樹（トチノキ）程の大きさで、中央に小孔が開き、尿道と射精管とに通じて居る。攝護腺を構成するものは、腺體組織と筋肉組織とであつて、これが强靱な嚢狀組織に包まれて、或液を分泌する。粘着性を持つた乳狀の此分泌液は、精子の生命と活動とに必要缺くことの出來ないものである。攝護腺の疾病、卽ち攝護腺炎に就いては詳しく後章に說く。

其他コーペル氏腺と呼ぶ、豌豆大の小器管が一對ある。位置は攝護腺に接近して、尿道に分泌物を注ぐ射出管を持つて居る。生理學上からは特別に重大視されて居ないが、若し淋病菌に犯されると、忽ち感染して恢復するに困難となる、慢性痲病の場合に屢、見る現象である。

第四章　生殖器の生理

精巣（睾丸）は、生殖器中の本體であり、子孫繁殖の源泉たる精子を生ずる器管である。精巣が種族にとつて最も重大な繁殖作用を營むことは、古くから知られて居たが、更に他の重大な影響を個々人に與へることは近年まで知られて居なかつた。然るに精巣は、個人の力、發達、精神生活、精神活動などに著しく影響するのである。而して此作用があるからこそ、頭腦に次ぐ重要器管と認められるのである。數千年の昔から、子供を產むに必要な分泌物を生ずるのは精巣であると知られて居た。（今日に於ても未だ野蠻未開の某人種間では交接と姙娠との因果關係を知らないものさへある。）然し精巣が精子以外に或內分泌物を生じて、それが血液に吸收され、個人の肉體的成長と精神的發達とに影響するといふ事實を發見したのは、極めて最近のことに屬する。男性の副性格を造り出すものは、此精巣の內分泌に外ならない。――髯の生ずること、毛が皮膚を蔽ふこと、筋肉、骨骸の男らしく發達

すること、濁音を帶びた男らしい聲の生ずること等は、凡て此内分泌に負ふところである。更にこれは全身に活氣をつけ、頭腦を刺戟し、神經組織、筋肉等を鼓舞すると、同時に、性慾衝動を起さしめる或物質を含んで居る。若し精巣の生ずる外分泌たる精子を、種族的分泌と呼ぶならば、此内分泌は、個人の幸福に與る個人的分泌と呼ぶことが出來やう。吾々は未だ、此内分泌を遊離させて、これに科學的解剖を加へることが出來ない。然し私は、此存在を確信して疑はないのである。人間に限らずあらゆる動物は、精巣を除去されたとき、著しい變化を來す、而して早く除去すればするだけ、變化も著しいのである。

男女共に生殖器を除去することを、去勢と稱してゐる。去勢された動物と、去勢されない動物との顯著な差に氣付かない者は居ない。去勢されない雄性動物は、凡て勇敢にして攻勢的である。精神的方面にても快活果敢である。然るに去勢された動物は、痴鈍、無感覺、柔順で、丁度勞働に適するやうになる。人間に於ても、少年期又は青年期の最初に去勢すれば、男性的發

達を遂げることが出來ない。聲は何時までも高い金切聲のまゝ、變化しない、鼻下にも、顏面にも髯を生じない。全體の筋肉、骨骸などが女性と同じ特徴を現はすやうになる。單に肉體的發達を見ないばかりでなく、精神的發達をも見ることが出來なくなる。而して臆病で、陰氣で、精神も、多くの場合痴鈍である。

攝護腺の作用は既に述べた通り、精子の活動に必要な液を分泌するのである。精巣から放たれただけの精子は、活動力を殆んど持つて居ない。即ち精子に營養を與へるのが、攝護腺の分泌液である。現代の生理學者の中には、攝護腺が精液を造る外分泌液の他に、内分泌液をも生ずると主張する者がある。然し其所謂内分泌は充分に研究されて居ない。人間の肉體に如何なる影響を來すかも明らかにされて居ないのである。

精嚢は普通の解釋に從へば、精液の單なる貯藏所である。然るに此學說は近年急激に變化した。精巣の分泌液の一小部分だけを貯藏するに過ぎないと言ふのである。吾々が嚢を壓搾して精嚢から採る分泌液は、精巣の

分泌液ではなく、精嚢自身の分泌液だらうと言はれる、卽ち今日の學說に依れば、精嚢は、單に貯藏所となるばかりでなく、同時に、攝護腺のやうに、それ自身の分泌液を生ずるものであると說かれてゐる。

コーペル氏腺及び尿道の腺リトレ氏腺は、アルカリ反應の分泌液を生ずる。此分泌液は、性慾衝動の勃發した時に生ずるものであつて、尿道をアルカリ性に化する。尿道は排尿の直ぐ後には、酸性反應を呈して居る。それは尿が酸だからである。精子は酸に犯されて忽ち死滅する、而してコーペル氏腺及びリトレ氏腺の分泌液は、尿道に生ずる凡ての酸性を中和して仕舞ふ。其結果、精子の活動にもこれが影響するのである。

精液。精液は特殊の臭氣を有する、濃厚粘着性の液である。而して女性を姙娠せしむるに必要なものである。吾々は今、精巢に生ずる液を精液と呼んで居るが、これは嚴密に言へば正しくない。尿道を經て外界に現はれる精液は、數種の分泌液を含んで居るからである。單に精巢から生じた液

ばかりではない、攝護腺、精嚢、コーペル氏腺、リトレ氏腺などの生ずる分泌液を全部含んで居る。精巢から生じただけの液が、他の分泌液を混へずに、女性を姙娠せしめ得るかどうか、これは實に疑問である。他の分泌液、特に攝護腺の分泌液が、其重大な手助けをするのだと思はれる。或學者は、此分泌液は精子が射出されてから女性の卵子と出會ふまでの營養になるのだと信じて居る。而して精子は數時間又は數日間を、女性の子宮內に空しく活動して卵子を待たねばならぬのだ、と信じて居る。此說は證明されてもされなくても、兎に角吾々は實驗する爲めに、これを容れていゝのである。要するに精液の健康と豐饒との爲めには、健康狀態の分泌液を凡て含有して居なければならぬ。若し攝護腺又は精嚢から生ずる分泌液が中止したと假定すれば、精子は無精力となつて死滅する。たとひ精子が如何程豐饒であり、如何程健全であると見えても、死滅を免れないのである。

精子。吾々が一滴の精液を取つて、顯微鏡で檢すると、忽ちに數千の微小

な動物體が、浮動しながら切りに其尾部を振つて居る狀態を見るのである。顯微鏡を用ゐた最初の學者が、これを見て小動物であると認めたことは、少しも怪しむに足らない。然しこれは動物ではなかつた。運動する最小細胞に過ぎなかつた。然しこれは實に不可思議な細胞である。肉體中の細胞であり、(女性の卵子は反對に最大細胞である)無限に產出されるものである。交接の際、一度に射出される精子の數は、驚くことには二萬と稱せられて居る。(或學者は二億と稱して居る。)而かも是等の一つ々々が皆男性の像を持つてゐる。而して女性の卵子に都合よく衝突すれば、卵子は受胎して、父のあらゆる特徵を具有する子供を生ずる。顏貌だの皮膚だの眼だのが似るばかりではない、實に微妙な、氣質、頭腦、壽命等までが、父と同一特徵を現はすに至る。如何なる顯微鏡を用ゐても、如何なる化學的解剖を施しても、男性二人の精子に何等の差異をも發見することは出來ない。然るに或者はニウトン、ユーゴー、ゲーテの縮圖となり、或者は社會に害毒を流す惡漢、殺人鬼となるのである。

精子は、頭部、頸部、腹部、尾部より成る。頭部は卵形にして扁平、側面より見れば槍狀をして居る。尾部はプロペラの用をするもので、常に前進し蠢動する動力となる。精子の速力は七分間に一吋の割合だと言はれて居る。

第五章　春機發動期

春機發動期とは、少年少女が、性的に成熟した時期の稱である。少年の發育は此期に至つて著しく變化する。先づ生殖器は次第に發達して、毛は陰部や腋部に生え、全身を蔽ひ、肩は廣く胸は厚くなる。少年の身長は俄かに數吋を增し、腕は長く垂れ、聲は次第に濁音を帶びて、鼻下には髯を生ずる。――殊に著しいことは性慾の眼覺めて來ることである。これまで漠然とした憧憬の心持を持つて居た少年の慾望が、俄かに明確な目的を持つて働いて來る。これまで恐れて居た夜間の漫歩を、切りに熱望するやうになる。

我國の少年が春機發動期に達するのは、大約十三歳から十五歳の間である。然し十二歳で達する者もあり、十六歳で達する者もある。漸く十七歳にして達した者もある。然し少年が性的發達を遂げたといふ意味は、其精液中に精子を含んで女性を受胎せしめる能力があるといふことであつて、肉體的に大人になつたといふ意味ではない。彼は尙十八歳乃至二十歳位

になるまで、器管を發達成長させねばならぬ。生物學上少年が結婚していいのは其後のことである。然るに若し其充分の年齡に達しないで結婚すれば、虛弱衰亡に陷るを免れない。凡ての人々が二十五歳、少くとも二十二歳以前に父親とならないやうにすれば、肉體上から見ても、社會上經濟上から見ても、共に優良な結果を來すに相違ないのである。

一般の說――恐らく諸君は現代行はれて居る性的知識普及の書物で讀んだであらう――は、春機發動期に至る前の少年少女に就いて次のやうに說いて居る。少年と少女との間に取立てゝ言ふ程の區別はない、凡て性慾に對しては、無關心な中性生物に過ぎない、春機發動機の到來と同時に初めて性の區別が生ずるのである、と。然し此一般の意見は誤謬である。性的本能は、人間の出生と同時に具有されるものである。少年と少女とが、肉體的差異を最初から持つて居るやうに、精神的にも差異を持つて居る、只肉體的の差異程著しくないだけである。少年の性的本能は、實に四歳五歳の頃から現はれる。彼等は異性に强い魅力を感ずる。そればかりではない、僅

か五歳六歳の少年が、少女或は中年の女性に烈しい戀をする、而して戀の目的物たる異性から嫌はれたり別れねばならなくなつたりして、失戀の苦味を嘗めることがある。五歳乃至十歳位の少年と少女とが、性的關係を結んで沒頭し盡すことも屢、見るところである。羞耻感情の發達する爲め、父母の訓戒や妨害の爲め、刑罰を恐れる爲め、性的本能は抑制せられて恰も絶無であるかのやうに、そして春機發動期の到來と共に初めて強く眼覺めるやうに見える。然し事實はさうではない。多くの少年には、五六歳の頃から多少の相違こそあれ、等しく性的本能が認められるのである。

性的本能を幼年期に認めるといふ問題は、單に學者としての興味があるばかりでなく、實際的興味を大ひにそゝるものがある。何故ならば、若し性慾衝動が、早く嬰兒期乃至幼年期に働くとすれば、それは、導かるべき知識も經驗も持たない子供が、非常に有害な習慣、變態的習慣にさへ陷るかも知れぬといふ理由になるからである。而して事實少年は、有害な習慣に陷つて居る。吾々が男女の患者に接して、其疾病其變態性を仔細に解剖して見る

時、往々にして患者の幼年少年時代に其原因を發見する。それ故に、人間は、嬰兒時代乃至幼年時代に於て、有害な影響から免れる爲めに、特に注意され、保護されなければならぬ。

第六章　手淫

本章で諸君に語ることは愉快な問題ではない、非常に不愉快な問題である。然し愉快であらうと不愉快であらうと、語るだけの義務を避ける譯には行かない。恐らく諸君は、手淫の習慣に就いて說かれた多くのものを讀んだり聞いたりしたであらう。現代に有り觸れた書物、殊に商賣的に書かれた書物には、多くのことが誇張されて居る。手淫に就て、其有害な結果に就いて、極端な大袈裟なことが書かれて居る。成程、ある時代には、手淫が恐るべき多くの疾病、肺病、白痴、狂氣、癌種、脊髓病などの原因となると考へられて居た。然し今日は、學說が非常に變化した。而して生理學者の中には、これと正反對の說、卽ち手淫が全然常態の現象であり、從つて些の害をも及ぼさない、と說く者さへある。多くの場合を綜合して見るに、眞理は此二說の中間にあると思はれる。以下私の信ずる眞理を諸君に語らう。

手淫は決して罪惡ではない、單に不良な行爲である。不良な行爲だと言

ふのは、次第にそれが習慣となるからである。習慣となつて仕舞へば全く惡い、而して有害である。然し時々の手淫は有害な結果を生ずるものではない、それ故適當な期間だけを禁ずることが出來るならば、何も取り立てゝ手淫の害を論じ、無駄な頁を費す必要はない。ところが、此禁ずるといふことが實に厄介であり、保證することが出來ない。人は、手淫に耽るために意志を弱くする、而して意志の弱くなることを知る前に、もはやそれが習慣となる。習慣となつては殆んど破ることが出來ない。而して諸君が、若し手淫癖の奴隷となつて、常にこれに耽る時、次第に肉體の組織を弱め、精神の發達を妨げ、遂には全身を破滅に導くのである。

諸君が從來手淫の惡風に染まつて居ないならば、今後も決して始めてはならない。然し既に行つて居るならば、直ちに止めなければならぬ。諸君の肉體と精神との爲めに止めなければならぬ。若し一時に止めることが困難なれば、徐々に止めるがよい。出來る丈け實行の度を少くし、然るべき醫師の注意を仰ぐがよい。然し私の言葉を誤解してはいけない、あらゆる

青年、適度に手淫を行つて居る青年までが悉く健康を損じ、精神を弱くする、と私は言ふのではない。常態にして健康な少年ならば、其大多數が有害な影響を受けないのである。但し常態にして健康な少年と私は言ふ。諸君は此點に注意しなければならぬ。凡ての少年乃至青年が常態で健康であるはずはない、薄弱にして神經的な少年、殊に變態的な少年が、手淫を實行したる爲めに恐るべき結果を釀すのである。意志は弱くなり、遂に惡習を打破することが出來ない。たとひ健康體にあるものにしても、若し非常に度を過せば、いふまでもなく其恐るべき禍害を免れることは出來ないのである。

諸君は惡習慣を父母や醫師に打明けることを耻ぢる必要はない、不面目だと思ふ必要もない。諸君だけが其點で特別な人間ではないからである。百人中、九十人は少くとも手淫を犯して居ると言はれる。犯す度合に多少の差があるだけである。或學者は百人中、九十九人乃至百人の比例、卽ち殆んど全部だと言つた。然し私の信ずるところでは、此說は間違つて居る。

患者が吾々を來訪して、其生殖器障害又は花柳病などに就いて意見を求める時に、吾々は患者が過古に於て、手淫の習慣を持つて居たかどうかを訊いては見ない、最初から習慣のあつたことを假定してかゝるのである。此事實がある爲めに、百分比は非常に大きく現はれて居る。吾々は單に患者が手淫を過度に犯して居たかどうか、始めたのは何時で、止めたのは何時かといふ點だけを訊く。其處に羞耻もなく、不面目もない。何故ならば此は道德上の質問でも、宗教上の質問でもなくして、單に醫學上の質問に外ならないからである。然し、若し身心を衰弱させて健全快活な子供を產むことが出來ないやうにする習慣の凡てを不道德であると見做すならば、其意味でこれも亦不道德であるに相違ない。

「假りに私が手淫に耽つて居て、此惡習を止めようと決心する。さうしたらどういふ方法を執るのがいゝだらう」――かういふ質問を諸君が發したとする、私は直ちにこれを止めるより外はないと答へる。而してこれには意志の力が第一の原動力である。若しも諸君が直に

止めようと欲して居ないならば、又意志の力を少しも働かすことが出來ないならば、如何に私が說教したり、威嚇したりしても、何の效果もないのである。然し私は諸君に助言することが出來ないと言ふのではない、諸君の苦鬪を大いに輕くすることが出來ないと言ふのではない。只だ、諸君自身で惡習を除かうと欲しなければならぬ、最高の意志の力を働かして克たうとしなければならぬ、と言ふのである。

然しこれは何時でも容易に出來る仕事ではない。ある場合には、打ち克たうとする爭鬪が非常に苦痛で、到底打ち克つ見込がないと思ふこともあるであらう。然し、私は繰り返して言ふ。其苦痛の時に諸君は、自分は罪人でもなく墮落しても居ない、惡習を止めることは自分自身の爲め、將來の妻子の爲めであると心中に期して、眞面目に此惡習に打ち克たうと念ずるならば、遂には最後の勝利を得るに違ひない。

此處に一つ注意して置きたいことがある。それは、たとひ手淫を諸君が止めたとしても、直ぐには身心の狀態が良くならないだらうといふことで

ある。却つて諸君は一層惡く一層不安を感ずるであらう。然しこれは漸時の間である。あらゆる習慣を破つた時、例へば煙草を禁じたり、酒を禁じたりした暫時の間は、却つて不愉快な狀態が續くといふ事實を諸君が知るならば、此場合にも決して失望しないであらう。手淫が永久に自分を亡ぼしたとは考へないで、あるだけの精力を集中して虛弱を恢復しようと、更に準備することも出來るであらう。

多くの少年や青年は、手淫の習慣が顏に現はれ、平生の態度に現はれて傍から見破られるに相違ないと心配して居る。それは愚なことである。世の中に手搖者の顏といふやうなものがある筈がない。面皰が手淫の徵とはならない、臆病で、內氣で引込思案であるのも手淫の結果とは限らない。如何なる人でも諸君の顏だけを見て、手淫をした顏だと認めることは出來ない、從つて諸君自身も他人の顏を早計に觀察してはいけないのである。

私は此點を餘りに力說し過ぎた。然しそれには理由がある。世の中には、手淫をして居るかどうかを的確に知ることの出來る明瞭な印跡がある

といふ考へを持つて居る人がある。此考は非常なる誤謬である。人間に大不幸を與へることがある。勿論青年が手淫過多に陷れば、當然貧血になり、顏色は蒼白になつて艶を失ひ、眼の周圍には輪が出來る。其他種々の顏面特徴は生ずるかも知れないが、これを他の病氣から生じた特徴と、さして區別することは困難である。例へば胃病、不眠症、痔其他の病氣は、これと同樣の顏面特徴を現はすものである。

私は多くの實例を持つて居る。其内の一つは特に多少詳細に引用する價値があると思ふ。

患者は二十六歳の男子で、極めて健康で、見るからに立派な男性の標本であつた。彼は、花柳病に感染することを恐れて、曾て女性に觸れたことがなかつた。其代りに一週間に一度、或は五日間に一度位の適度の割合で手淫を行つて居た。然し勿論それは彼に何等の影響をも與へず、彼の健康は同じやうに保たれて居た。然るに彼はある人間から手淫に就いての說明を聞かされた。手淫は人間の顏に現はれて認められるものだ、と敎へられた。

そこで彼は一二の書物、駄法螺を大袈裟に書き列ねた書物に就いて此問題を研究した。而かも其處には矢張り同じ意見が書かれて居た。其時から、彼は世間のあらゆる人々が憐憫と嘲笑とを以て自分を見て居るやうに想ひ、何でもない表情をも、他人は手淫の證據と見るだらうと疑ひ始めた。彼は元來商人であつた。誰にも好かれ同情される人氣者であつた。而して商賣は常に繁昌して居たが、其時から、彼の日頃の信用と成功とが日々失はれて行つたのである。それは彼が他人の眼を見て、其意味を疑ひ、遂には自ら臆病になつて、勇氣と自信とを失つたからである。

私は此患者に親しく接近して、彼の物語を注意し、同感しながら聽いた。而して現在彼の信じて居る說は全然讒言に過ぎない、顏面には手淫の跡を示すやうな何の特徴も現はれて居ない、と斷言した。所謂、手淫者の顏といふ說は、無智な法螺吹きの發明したものに過ぎないから、安心していゝと慰めた。彼は私の言葉を直ぐに信用した。而して勇氣と自信とを恢復して、再び昔のやうに商賣に沒頭し始めたのである。然るに若し彼が法螺吹き

學者の手に全然陷つて居たならば、勿論治癒することの出來ない憂鬱症か性的神經衰弱かなどに襲はれたに違ひない。

これが重要な點である。手淫の徵候と惡結果との多くは、手淫其ものに原因があるのではない、恐るべき結果を生ずるだらうとの恐怖心にあるのである。此ことは次の事實に依つて明確に證明される。吾々が患者と話し合ふ時に、其多くの徵候は、彼の恐怖心の結果に過ぎないと說明してやれば、彼は直ちに恢復して、多くの徵候も消滅するといふ事實である。頭痛、不眠、減食、記憶力の減退、凝思の不可能、希望の消失、何か不幸が起るだらうとの絕えざる不安、人前に出ての臆病、公衆の面前での引込思案、自殺しようといふ考へ等といつたやうな、患者の訴へる徵候は先づこんな種類のものである。これを愼重に解剖して、小麥と粃殼とをば別たなければならぬ。これは單に駄法螺の書物を讀んだ爲めに生じた恐怖心の結果に過ぎないと患者に說明する。而して眞實の狀態を、輕視せず誇張せずにありのまゝに說明しなければならない。さうすれば患者は未だ其說明を全部終らない內

希望に輝く表情を現はして、忽ち恢復の一歩に向ふのである。私はかうした實例に幾百となく接して居る。それ故に特に此項に力をそゝいだ。手淫其ものゝ害よりも、手淫の害の結果を空想し恐怖する方が、どれ程有害か知れないのである。

今一つ注意することがある。善良な人々の中には、手淫が一般に信じられて居る程有害なものではないといふ說を世人に傳へることは、果していいことだらうかと疑ふ者のあることである。彼等は、此說が手淫の惡風を擴めたり、或は現狀を維持したりする手助けになると言ふかも知れない。然し實際は反對である。此ことは他の場所で、既に私の言つたことであるが、左に引用しよう。

「私の意見では、手淫はたとひ適度に行ふにしても、有害な結果を與へて愈、其習慣を破るに困難となる。然し思考力のある醫師乃至世人ならば誰でも、手淫の習慣を餘りに恐怖して考へることは、却つて未來ある人間に必ず反對の結果を與へると言ふことが出來る。何故ならば、習慣の犧牲者は、自

分自身を墮落した人間、全然度し難い人間だと考へるからである。而して彼等は自重心を失つて、其爲めに愈、惡習を脱することが困難になるのである。

吾々はあらゆる年齢の患者に接する。さうした時には、道德方面の問題には觸れないで、單に生理方面の問題だけに觸れる。手淫は生理上有害であると力をこめて言ふ、但し誇張して言ふのではない。――さうすれば非常に效力があるに違ひない。吾々は少年少女の自重心を傷つけようとは思はない、自重心は增して貰ひたいのである。だから患者を勵ますに信賴を以てし、習慣が續けば將來の成長、身心の健全と幸福とに危險を及ぼすだらうと說明する。さうすれば患者は容易に慰められるのである」。

最後に、參考の爲めに言つて置かう。或人は、子供のときに手淫を、絕間なく然し規則的に行つたが、成長した後には健康體となり、精力家となつて遂に成功した。彼の惡習慣は、全然何等の結果を肉體上にも精神上にも及ぼさなかつたのである。こんな實例を私は幾百となく擧げることが出來る。

惡心を持つ人の故意にする誤謬に對しては、どうすることも出來ない、然し眞理を求める人の止むを得ない誤謬を除く爲めに、玆に數語を費す必要がある。此章は、手淫の辯解でもなし況して答辯ではない。然し一般に勢力を占めて居る現象、其性質の全然醫學的である現象に對する正しい態度の答辯である。無意味な、有害な誇張に對する答辯である。虛妄に反する事實の答辯である。簡單にして言へば、此章は、虛僞を敎へられて次第に神經衰弱や憂鬱症に襲はれる人々に對する答辯である。彼等は、眞の事實を敎へられたならば直ちに常態に返り、健康を復し、生を享樂する人間となれるのである。

第七章　手淫癖の豫防

患者が手淫癖に苦しんだ結果、吾々に相談をしかけて來た時、其豫防法を說き聞かせても既に遲いのである。然し本書は、發育盛りの子供を持ち、其子供の幸福を願つて居る幾多の父親にも讀まれることであるから、此處に手淫癖の豫防に就いて數語を費すことは、更に無益でないばかりでなく必要なことでなければならない。

子供の手淫の惡習を豫防する根本の方法は、幼年時から其子供を注意して監視することである。世の中には時々馬鹿に惡い子守だの乳母だのが居て、心つかずに大切な子供を惡習に導き入れることがある。中には相當の教育ある家庭教師の婦人さへも、さういふ場合があるといふことを私は聞いて居る。先づ此點を豫防しなければならない。九、十、十一歳の子供でも、一人で放して遊ばせてはいけない、必ず監督者を附ける必要がある。少年と少女との餘りに親しい交友、殊にそれが年齢の相當距離ある場合には、

疑ひの眼を以て視なければならぬ。十四、十五、十六歳位になつた少年は、定つて、十、十一歳位の少年と親密にはならないものである。

數人の少年と少女とを、年長者の監視がない場合、一定の場所に寢せることはいけない。

二人を同一の寢臺に寢せる場合があつて、其二人が子供同志であつても、子供と大人とであつても、特別の場合の外は同一の寢臺は許さない方がいい。但し此主張には例外がないといふのではない。一人の方が母親、父親、兄、姉などならば、勿論差支ないが、往々にして此二人寢るといふことが危險を生ずるものである。身體の相觸れることから、無意識に手淫を誘發する事は吾々の屢聞く實例である。

子供は、少年でも少女でも、多少硬い位の寢床に一人で寢せる必要がある。掛布は輕いものを選び、足の先までを蔽はねばならぬ。而して子供には其兩腕を毛布又は掻卷の上に出させておくやうにする。此方法は、幼い子供時代から習慣的に行はせれば後には非常に樂に眠ることが出來るやうに

なる。而して手淫に陷る機會を少くするのである。それから、寢床の中で愚圖々々して横はつて居ることを子供に許してはならない。朝、子供が眼覺めたならば、出來るだけ早く起き上がらしめる必要がある。一般に子供を養育するには性質を鼓舞鍛錬しなければならぬ、これを肉體にも精神にも應用しなければならぬ。子供が九歳から十三歳(但し九歳の子供で十三歳位に發達する者もあるから、其點はよく判斷して區別する。)位の年齢に達したならば、生殖器を弄ぶことの不善であること、有害であることを話して聞かせなければならぬ。而して同時に生殖器に觸れるやうに誘ふ友達、生殖器又は情事を口にしたがる友達などを避けるやうに戒しめなければならぬ。

溫度の高い浴湯はよくない。手淫の方向に導き易いのである。高熱の湯は青年男女をも少年少女をも刺戟する、而して性慾の衝動を起させるのである。事實私は男女共數人の患者に會つたが、彼等が最初の手淫を、熱い湯に這入つてゐる時に犯したと言つて居る。勿論、手淫は快感を覺える、其

爲めに幾度も繰り返すに至るのである。

子供の衣服に就いて一つ注意したいことがある。それはズボンにポケットを作らないといふことである。即ちポケットに常に手を突込んで居る中に、何時しか手淫を覺えるからである。甚だしい子供になるとズボンの裏に小孔を開けて、手淫をそこで犯す者さへある。

性的本能を誘致する傾向を持つたものは、何でも嚴禁しなければならぬ。喜歌劇や、或種の舞踏などは此點に於て、年若い少年少女に有害なものである。但し私は現代の劇場を檢閲せよと言つて居るのではない、只だ事實を述べるだけである。私を訪ねて來た多くの患者は、或歌劇物興行物を見物して居る時、其最初の手淫を覺えたと言つて居る。だから私の信ずるところでは、父兄が注意して肉感的な喜歌劇、猥褻な舞踏などには子供を觸れさせないやうにするがいゝと考へる。

精神的手淫と呼ぶものがある。青年の中には、手淫の有害なことを聞き

及んで遂に惡習を斷つ者がある、然し所謂肉體的の實行を斷つただけで、彼等は尙ほ吾々の呼ぶ精神的手淫を犯して居た。卽ち、精神をある異性、又は淫猥な繪畫の上に凝結させて、あらゆる場面を空想に描き遂に精液を射出する。而して實際に手淫を行つて居るのでないから萬事結構だと考へて居る。これは非常な誤謬である。あらゆる手淫の形式で、此精神的手淫程有害なものはない。忽ち神經衰弱乃至生殖不能などに導いて行く。何故かと言ふに、心的經過だけに依つて射精を行はうとするには、生殖器の充血と神經の興奮とを程度にする必要があるからである。從つて生殖器と神經組織とに及ぶ害は避けることが出來ない。

精神的手淫はどうしても止めなければならぬ。若し、手淫に耽らずにも居れず、意志が弱くて全然止めて仕舞ふことも出來ないといふならば、寧ろ精神的手淫を棄てゝ肉體的手淫を採るがいゝ、其方がまだ多少でも害が少いからである。

第八章　夢精

夢精又は遺精とは、睡眠中に精液の洩れることである。これは大抵、情事に關する夢に伴つて起る。自分が異性と交接したり、戯れたりして居るような夢である。一般流行の書物には、手淫の場合と同じく、夢精の害も非常に誇張して說かれて居る。夢精は必ず性的不能に陷り、記憶力を失ひ、身心の衰弱を來し、狂氣に導くなどゝ言ふ。然るに一方では、夢精の結果は全然害とならないなどゝ反對を唱へる醫師もある。然し實際は其折衷したところにあるであらう。

諸君が若し一ヶ月に一度、或は二三週間に一度、或は一週間に一度位の夢精に襲はれて、而かも翌日倦怠を覺えることがないならば、强ひて意に介するには及ばない。其程度ならば、吾々の呼ぶ生理學上の常態である。精囊、輸精管などが精液の過剩によつて、出口を求めたゞけのことである。然し若し一週間に一度以上の夢精を見るならば、確かに變態であり病氣である

から、早速著名なる醫師に相談すべきである。たとひ夢精の後で氣分の輕快を感じても、放擲して置いてはいけない。何故ならば、夢精の習慣がついて殆んど毎夜、一度乃至數度も襲はれるに至るからである。其反對に若し諸君が、夢精の後で非常に衰弱したことを感ずるならば、矢張り醫師に相談しなければならぬ。たとひ二三週間に一度位の僅かな夢精でも、翌日の結果が惡かつたならば、自分で處理して醫師の指圖を俟つがいゝ。

夢精を放擲して置くと、著しい徴候を現はす。一例を擧げるならば、夢精に惱んで居る患者は、頭痛、後頭部の苦痛、頸部又は脊部の筋肉の衰弱などを訴へる。眼前に點が浮んで見えたり、或場合には、眼の周圍に輪が黑く生ずる。舌は膜を張つたやうになつて全然食慾が無くなり或は無暗に食つたりする。便秘して通じなかつたかと思ふと時に非常に下痢をする。嘔吐を催し吐き散らしたり、又胸燒けがしたりする。此消化不良は非常に身體の衰弱を招くものである。階段を上下したり走つたりすると、息切れがして、心臟の動悸は何時も烈しくなる。ほんの一寸身體を使つても烈しくな

る。身體を曲げた後、食事をした後、精神の少しでも興奮した後、精液の洩れた後などにも烈しくなる。倦怠と疲勞との感じが常にある。足は熱つて午後になると重くなる。精巣(睾丸)に神經痛のやうな苦痛を覺える。

かく肉體的徴候が著しいと同樣に、神經的徴候も亦著しいのである。其最も主要な點は、精神を集中させることの出來ないことである。仕事に執着して、それを繼續的に行ふことが出來ない。晝夜の夢精に苦しむ人間は、堅固な精神集中を必要とする良い位置に就くことが殆んど出來ない。彼は奔走努力してたま〳〵好職業を得たとしても、長く繼續することが出來ない、如何なる場合にも彼の精神は空虛となり、遂に自分で言ふ通り「碌でなし」となるのである。

次に主要な徴候は「希望の缺乏」である。此言葉は、形容的に言つて居るのではない。實際狀態を述べて居るのである。患者は何が起らうと注意しない。彼が成功するかしないかをも注意しない。彼は慾がないのである。彼の生活に就いて何の希望をも持つて居ないのである。

次に著しい徴候は、記憶力の減退である。過剰に精液を消耗することから生ずるこの記憶力の減退は、非常に興味ある問題である。卽ちこれは生殖器と頭腦との密接な關係を示して居る。而して此關係を示して居るものは他にないからである。精液の過剰に洩れることは、終に頭腦に影響しないでは居ない。諸君が夢精に襲はれないやうになればなる程、記憶力は恢復するのである。

絕えず襲ふ夢精の爲めに生ずる特徴は、此處に擧げたやうに非常に著しいものがある。青年を眞純のまゝで保たせたい爲めに故意に此重大點を輕視して說かうとする學者、或は反對に有害な結果だけを誇大して說く學者は共に不誠實であると言はなければならぬ。私は繰り返して言ふ。比較的輕度の夢精でも放擲して置いてはいけない、適當な處置を採らねばならないと。

處置は醫學的であつて同時に衞生的であること、而して醫學的處置は醫師に一任すべきことである。衞生的處置は極めて簡單で、あらゆる種類の

刺戟物を避けさへすればいゝ。酒類は如何なる種類も嚴禁する。珈琲と茶とは出來る丈け禁ずる。小量の水を夕方用ゐる、然し就寢前に膀胱を空にして置かねばならぬ。夜半に便所に立つ習慣を作るのはいゝ、膀胱に尿が充ちて居ると夢精の原因となることがあるからである。便秘は注意してさうならないやうにする。便秘し、た時の直腸が攝護腺や輸精管を壓迫して、夢精の原因となることがあるからである。それ故に、便秘して居る時は、夕方に灌腸して直腸を清潔にして置く必要がある。寢床はどちらかといへば硬い方がいゝ、姿勢は横になつて右側を下にする。仰向けになつて寢ることは非常にいけない。それを防ぐ爲めに、背部に當る場所に結び瘤を作つた手拭か繃帶かを置く、さうすれば睡眠中無意識に仰向けになつた時、背部の痛みで必ず眼覺める。掛布は輕いものを選ぶ、而して足を暖める爲め指の先まで充分に蔽ふ必要がある。諸君は、身體上の刺戟を避けると同時に又精神上の刺戟を避けなければならぬ。若し諸君が夢精を處置して治癒しようと願つて居る一方で、少女達と戯れたり、近代的の舞踏をした

り、褻猥な書物を讀み耽つたり、淫猥な興行物を見たり、或は性慾問題に精神を勞したりすれば、結局何にもならないのである。

私は諸君に間違つた印象を持つて貰ひたくない。私は決してあらゆる夢精が、醫學的及び衛生的處置で根治されると言つて居るのではない。だから諸君にさう信じて貰ひたくないのである。私は只だ多くの場合治癒されると言ふ。治癒されない場合は、更に他の方法を採らなければならぬ。ある場合には異性との正しい交接を勸めるより外、仕方のないこともある。

夢精の現象は、通常夜間睡眠中に起るものであるが、晝間眠覺めて居る時に起ることもある。此現象は通常の夢精に比較すれば稀で、生殖器が過度の手淫、過度の夢精に苦しんで衰弱した爲めに襲はれるのである。此場合は一刻も早く熟練な專門家の處置を俟たなければならぬ。

それよりも更に變態な現象がある、精液の流出する現象である。患者は常に、或は殆んど常に、極めて僅かな勞力や興奮の爲め精液の數滴を流出する。而してある場合には、殆んど連絡して精液を流出する。この現象は非

常に重症であるから、熟練な醫師の治療を受けなければならないが、幸に實例に乏しい。大抵の患者は、攝護腺の分泌液、尿道腺の分泌液などを失つて居る時、精液を失つて居るのだと考へて、死ぬほど恐れるのである。幸にして精液でないから、充分の處置を採ることが出來る。

第九章　性的不能（性的能力の微弱をも含む）

男女共に滿足して交接を適當に行ふことの出來る狀態――それには幾つかの必要な條件がある。(一)適當な性慾衝動、卽ち色慾があること、(二)適當な陰莖の勃起作用があること、(三)交接の頂點、卽ち精液を射出する間の恍惚狀態が餘りに早く來てはいけないこと、相手の女子が滿足するまでは、交接を續けることが出來ること、(四)非常な快感を交接中も恍惚狀態の時も感じなければならぬこと。

以上の條件の中、一つでも弱いか缺けるかして居る時には、完全な交接を遂ぐることが出來ない。然しこれには部分的もあり全體的もある、一時的もあり永久的もある。一條件だけが缺けた場合もあり、二三の條件が時には四條件が共に缺けた場合もある。

次に列擧する數ヶ條の一つに相當する場合は、性的不能か性的微弱かである。

(一)色慾缺乏の場合。此種の患者は、女子に何の慾望も持たないものである。從つて全然、性的關係に注意しない。陰莖の勃起作用は充分であるが、交接しても快感を生じない。(二)一の場合、卽ち色慾の缺乏に、勃起作用の不可能を加へた場合。(三)色慾は常態以上であつても、勃起作用の不可能な場合。(四)色慾も常態、勃起も常態、然し射精が極めて早い場合。卽ち早漏の患者は、陰莖を挿入しない前に射精したり、挿入すると間もなく射精したりする。(五)色慾も常態、勃起も常態、射精も常態、然し此場合は大抵早目にはなるが、であるが、交接に快感を伴はない。射精中の恍惚狀態を、全然感じないばかりか、時には火傷して居るやうな苦痛を感ずる。(六)色慾も常態、勃起も常態、然し射精の時間が餘りに長く、自分も相手も疲勞し果てる場合、或は反對に射精があつたかないか解らない程短い場合。(七)色慾なく、勃起なく、射精なく、然し人工的な種々の方法で、極めて小量の射精を行ふことが出來る、勿論快感を伴つては居ない――といふ場合。

以上七つの場合である。この中で、(三)と(四)との場合を最も多く見る。そ

の(三)と(四)との中でも、(四)即ち早漏の場合が殊に多いのである。

吾々專門家は一般に、此不能又は微弱を二種類、器管的と心理的とに分類して居る。器管的に生じた障害の原因は明瞭に見ることが出來る、例へば睾丸炎などの場合である。心理的に生じた障害の原因は、多くの場合、患者の精神内に潜んで居る。彼は實際には不能ではないが、それを不能だと想像するのである。器官的の場合は、矢張り他の諸病と同じく醫學的治療としなければならぬ。然し心理的の場合は、其儘にしていゝのである。其他の場合老衰して交接不能になるのは、生理上の結果で止むを得ないことである。

手淫。これは普通の原因となる。何故ならば、既に述べた通り、あらゆる人間の性慾生活は、手淫を以て始まるからである。手淫は心身の發達した後に始まつて適度に行はれるならば、多くの場合、有害な結果を及ぼさない。然し十歳、十二歳、十四歳位の年齢に始つて而かも亂暴に行はれるならば、遂には全然交接不能に陷るか、一時的不能に陷るかするのである。

夢精。一週間に一度以下の夢精ならば、特に害はない。然し度數と時間とが甚だしくなれば、最後には此重要な原因となるのである。

攝護腺充血。攝護腺の炎症又は充血は屢、不能の原因となる。常にさうなるとは言へないけれどもなることが多い。

尿道充血。これも屢、主要な原因となる。殊に早漏の原因となる場合が多い。

痳病。手淫に並んで交接不能の主要な原因となる。直接痳病が原因となるのでなく、痳病の併發症、例へば睾丸炎などが原因となるのである。

尿道狹窄。痳病の併發症で、性的不能の主要な一因である。勃起不完全にして早漏となる。

生殖器缺損。陰莖、精巢などの狀態が、肉體的に交接不能を導く。不能とならないまでも、困難となり不滿足となる。例へば陰莖が過大の爲め、如何なる女子の膣にも挿入されないやうな場合、陰莖瘰癧などの生じた場合、陰

莖畸形、例へば勃起した時一方に彎曲して交接の困難な場合、其他、尿道が陰部の上部に開いて居たり、下部に開いて居たりする場合、凡て交接不能に陷るのである。

精巣異常。先天的に精巣を缺いて居る場合は、勿論色慾も起らないし、從つて交接不能である。

精巣萎縮。これは先天的にも起る、手淫過度、房事過度の場合にも起る症狀で、色慾を消滅させて性的不能に導く。但し精巣を後天的に除去された場合は例外である。一般には精巣の無い人間は、同時に性的不能だとされて居る、然し去勢された男子が凡て性的不可能であると言ふ定說は、非常な誤謬だと考へられる。事實、彼等の中には、交接するに充分な精力を持つ者もある。

歇兒尼亞（ヘルニア）。陰囊の歇兒尼亞は、屢、不能の器械的原因となる。

攝護腺疾病。攝護腺の異常、例へば攝護腺肥大、攝護腺炎などゝ場合は、屢、不能の原因となる。

包莖。包莖は交接の障害となるものである。

年齡。年齡は最大の原因である。何人も老齡に近づけば性的不能に陷る、然し幾歲の時に不能となるか、幾歲にて不能となるのが常態かといふ質問には容易に答へられない。何故かと言ふにこれは各人それ々々に屬して何人にも共通した法則はないからである。

四十歲に於て精力が減退し、五十歲に於て精力が消滅するといふのが通常の場合である。大抵の人間は、此法則に支配される。然し五十歲乃至五十五歲に於て、尙ほ三十歲の時と同じ精力を持つて居る人間も多い。

房事過度。房事過度も性的不能を誘致する。花柳病專門醫ならば誰しも此事實を證明することが出來る。然し幸にして房事過度を原因として生ずる不能は、一時的の性質を持つて居る。最初と同じ精力にはならないが、兎に角治癒されて恢復するのである。然しこれは青年の場合だけで、若し少年時代に房事過度の犧牲となれば、永久的不能となつて恢復の見込がつかない。此實例として私は少年（八、十、十二、十四歲）を數人知つて居る。

彼等は無智な下女や子守の爲めに教へ込まれて、一日に數回の交接を行つた。無意識の裡に恐るべき犠牲となつて、一生恢復されない不能に陷つて仕舞つた。

此問題に關して、何よりも有害な結果を與へるのは、幼年時代の手淫である。手淫過度も青年時代になつて始められたならば、比較的害も少いし不能となつても一時的である場合が多い。然るに幼年時代又は少年時代の初期から始められたならば、恐るべき結果を生じ、殆んど永久的に恢復されないのである。

禁慾。若し長く繼續して性的滿足を凡て嚴禁したならば、其結果は、性的不能に陷る。——これは私の信念である。全然不能にならないで、部分的の不能になる場合もあり、永久的の不能にならないで一時的の不能になる場合もあるだらうが、兎に角不能に陷るものである。

自然は吾々人間の反對することを許さない。全然活動しない器官の存在を許さない。數年の間も萎縮させて應報に會はないやうな作用の存在

を許さない。それ故に生殖器官を長く繼續して活動させないならば、遂には其應報として不能に陷るのである。

交接中止。交接を中途で中止すること、即ち將に射精の氣分にならうとする瞬間、男女共に恍惚狀態に移らうとする絶頂に於て、急に中止すること、これは非常に愼しむべき行爲である。これは人類の文化に對して有害な結果を與へる。憂鬱症や神經衰弱などに陷る原因となり、同時に性的不能の確實な原因となる。

藥劑のあるもの。例へば阿片、モルヒネ、コカイン、煙草、ポッタシウム、硝酸鹽(硝石)など、性的精力に有害な影響を及ぼす。其他肥大症、酒精中毒などは必ず有害な結果を示して居る。

其他に原因となるべきことは多いが、其主要なものだけを列擧したい。

苦惱。私はこれが最も重大な原因だと考へる。苦惱する心持ほど性慾を消滅させるものはない。此ことは一般に知れ渡つた事實である。然し性的不能になる原因とは多くの人が氣付かない。況して永久的不能にな

るなどとは考へて見ないのである。多くの場合、原因が去つてからは、此は次第に消失して來る。然しそれは多くの試練を要することであつて、遂には最初の精力に返る時が來ないのである。

恐怖。烈しい恐怖は一時的の性的不能を來す。然し普通の恐怖は交接に僅かに影響するだけである。これに就いて興味ある實例がある。姦通した男子が、丁度姦婦と同衾して居る最中に、其夫と數人の密偵との爲めに、戸を破られて現場を發見された。すると、其後一ヶ年ばかりの間、實際に交接不能となつたのである。彼が女性と床に這入ると何時も其夜の恐怖が再び胸を襲つて、折角勃起しても忽ち萎縮して仕舞ふのである。

學術的研究。只管學術的研究に二六時中沒頭する學者にして性的不能に陷らない人は稀である。不能でないまでも大抵は精力の微弱を免れないやうである。但し此事實は、純粹の科學的研究——數學、科學、統計、哲學などの分科に沒頭する學者だけの場合である。殊にある問題に關して肉體をも精神をも傾注する側の人に多い。或醫學研究の大家が嘗て私にこん

なことを話した。寸暇を惜んで研究して居る問題のある時、そしてそれが將に十八ヶ月間に及んでも、殆んど慾望も無ければ、またさうすることも出來なかつたと。然し同じ研究でも、藝術方面——詩歌、戲曲、彫刻、繪畫、文學などの方面に沒頭する學者は、其反對の結果を生ずるものである。性慾衝動も強くなり、性的精力も盛んになるのである。

劇烈な性慾衝動。これも屢、早漏の原因となる。長く許嫁の間柄であつた青年男女が、新婚の夜に現はす烈しい慾望などこれに屬する。それ故相思の儘で長く結婚しないといふことは、往々にして不能の原因となり得るのである。

私はこの項を餘り詳細に說き過ぎたかと思ふ。然し原因を詳細に知ることは、諸君を疾病から免れさせる一助にもなるだらう。性的不能に導くやうな原因の凡てを避けて、始めて諸君は不幸ならぬ生活を營むことが出來るであらう。不和ならぬ家庭も其處から生ずるに違ひない。

其他。諸君は今不能を導く幾多の原因を知つて、世間に有り觸れた山師

的醫師の不誠實と駄法螺とを感じたであらう。彼等は、諸君の其原因を藥劑其他の方法で治療しようと約束する。諸君を吟味しないで、諸君の狀態を觀察しないで、何時でも其不能を治癒すると約束する醫師の中には、諸君の金錢を目的とする曲者も含まれて居る。曲者であるかないか、これを諸君は注意しなければならぬ。

性的不能の治療なるものは非常に復雜纖細である。力量のあると同時に經驗を積んだ醫師に、熟練した最上の判斷をして貰はなければならぬ。先づ普通と稱せられる專門家では、少し困難な不能の原因を除去することは覺束ない。此事實は殘念ながら私達專門家の齊しく自白するところである。無智な山師的醫師の治癒するといふ甘言に捕へられてはならない。

第十章　性的神經衰弱

性的神經衰弱は最も流行する病氣である。而して其數も常に增加の傾向を示して居る。現はれ方は其性質に從つて種々であるが、只だ此病氣の影響を受けて、何等の著しい徵候を現はさない器官は、吾々の肉體中に一つもない、患者の肉體ばかりではない、其心理も精神も非常に影響を受ける。それは性的基礎の上に立つ一般肉體的と神經的との疲勞の狀態である。

性的神經衰弱の原因を、簡單に言へば、先づ第一――手淫及び生殖器の疾病。第二――現代の文化。第三――遺傳。此三種に分けられる。

第一の部に屬するものゝ內、主要なものは、手淫、夢精、交接中止、禁慾、複雜な意味の淋病、攝護腺炎、房事過度などである。

第二に言つた現代の文化と云ふ意味は、現代文明の作用を指したのである。吾々の神經組織を疲勞させ空費させる文明、吾々の性慾本能を、機の熟

しない內に眼覺まして、常に刺戟し苛立たせる文明の意味である。

幼年時代からの學校生活、過度の勉强、度々襲つて來る學年試驗、(これ等は殊に有害な結果を生ずる。) 工場乃至商店での長い時間、食を得る爲めの生存競爭、生涯の爲めの神經を勞費する爭鬪、金錢を得る爲めの絕えざる努力、更に其上に金錢の爲め名譽の爲めの苦しい奮鬪、現代の詩歌、小說、劇場、舞踏、興行物、貴婦人の扮飾、其魅力ある服裝、無智な見知らぬ異性の誘惑、惡友 —— これ等種々のことが、原因を作り出して居るのである。

然し以上列擧した以外に、更に最大の原因がある。これは卽ち性慾本能に關して人間の懷く倫理的宗敎的觀念である。此觀念が深く吾々の胸底に巢喰つて、あらゆる性的現象を祕密裡に包み、結婚以外の形式で性慾を滿足させることを非常に困難とするのである。要するにあらゆる性的現象を抑制すること、これが最大の原因である。

第三の遺傳に就いては、私は重大な意義を認めて居ない。神經衰弱の主因として、遺傳は餘りに誇大されて考へられた。然し私と雖も、次のことだ

けは、些の疑惑もなしに承認するのである。神經衰弱になつた親の子供は、性的に變態の傾向を帶び易い、而して其結果、性的神經衰弱になることもある。又身心の健全な親の子孫は、不幸な結果に陷ることが、比較的少ない。然し只だそれ丈けのことである。

性的神經衰弱は、三階段に分類される。其第一階段では、泌尿器の一部分に影響して、交接の際、排尿の際にも妨害を感じ、引いては生殖器の內部又は周圍に苦痛を感ずる。第二階段になれば、神經は脊髓方面にも移つて、患者は切りに脊髓の刺戟を訴へる。第三階段になつて一般性的神經衰弱の徵候を全部に現はして來る。これ等各階段の徵候は、概して交錯して居る爲めに、所謂第二第三の階段の症狀でも、所謂第一階段の徵候を示すことがある。

性的神經衰弱の徵候は極めて多種多樣である。分類して見れば、生殖器的、泌尿器的、感覺的、循環器的、消化器的、心理的の分類となる。

生殖器的徵候。生殖器系統の障害が先づ第一の徵候である。此種の患者は、精神が微弱で生殖器が萎縮すると言ふ。そこで裸體にして見ると、實際、陰莖が非常に短小で引縮して居る。生氣がなくて硬い。精巢(睪丸)は普通である。然し感受性が極めて強い。一寸觸れても非常に痛苦を感ずる。ある時には、指と指との間に挿んで輕く押へても、患者は死ぬ程に苦悶の色を現はす。戰慄して將に氣絕しかゝることがある。時としては本當に氣絕することもある。

夢精には屢、襲はれる。それも最初は輕症であるが、次第に重症となる。患者は勃起作用をも失つて全然交接不能に陷るか、それ程でなくとも、勃起が微弱不完全の爲め直ぐに萎縮する。射精は、多くの場合早漏となつて、挿入前に行はれる。更に特殊な徵候は、患者が射精中に、火傷して居るやうな感じを受けることである。普通健全な人々が、射精中、卽ち交接の最高絕頂たる恍惚狀態になつて、有頂天的な快感を覺えるに反し、彼等は、其快感の一部分さへも覺えないばかりか、實に熱湯をそゝぐやうな惡感を覺えるのである。

烈しい制し難い手淫欲を屢、訴へる。此症狀の原因の一として擧げた手淫を再び此處に取出して、此結果であると言つたり、徵候の一つだと言つたりすることは、一見矛盾であるかのやうにも考へられる。然しこれは少しも矛盾ではない。

世間には、他の多くの病氣の場合に於ても、眞の原因を間違つて、結果の一徵候に過ぎないと考へる學者がある。手淫は、勿論性的神經衰弱の最も重大な原因の一つである。然し手淫が原因となつて、性的神經衰弱の結果を生じた場合には、患者の意志が薄弱になつて、遂に手淫癖の度し難い奴隸となる。それ故に原因は、此場合、又結果となり得るのである。

或患者は交接の爲めに極度の影響を受ける。精神も肉體も疲れ果てゝ、早くても一日、遲ければ數日、或は數週間を呆然として暮すのである。頭腦は朦朧として、精神を一事に集中させることが出來ない。足は弱つて、僅かの散歩にも忽ち倦怠を覺え、其果ては劇しい心臟の動悸に惱まされるので

ある。

生殖器の機能的障害は大體以上に擧げた通りであるが、其上に患者を惱ましし醫師を困らす數多くの徵候がある。例へば、陰莖、陰囊などの皮膚の感覺が鋭敏になり過ぎて、爲めに患者は種々の刺痛、或は神經痛を訴へる。殊に一般に著しいのは、寒冷に對する極端な敏感である。精巢の痛苦、攝護腺の痛苦、共に同じ程度に於いて患者を苦しめる。時によれば其苦痛は急激に襲つて來て、それきり止る。然し時によれば長く續いて、攝護腺に至り、腎臟に及び、脛部、足部のあたりにまで及ぶ。又或時には、生殖器に劇烈な痛痒を覺える。然し其痛痒の原因を發見することは、如何に精密な試驗を經ても尙ほ不明である。時には、生殖器でなく、肛門にばかり痛痒を覺えこるともある。

泌尿器的徵候。排尿作用を非常に妨害する。患者は排尿の度數が增し、殊に晝間に於いて行はれる。夜間は、難症にならない限り、度數が少い。患者は大抵、夜間はよく睡眠すると言ふ、夜間餘り起きるやうなことはないと

言ふ。此點が一種の特徵である。同じく排尿度數の頻繁を徵候としても、他の病氣の場合とは、此點で著しく相違がある。場合に依れば、度數の甚だしいこと、每一時間、每十分、每二十分位に排尿しなければならぬ。排尿後にも尙ほ小量が滴つて、充分に排尿したといふ感じを與へない。患者は常に尿が膀胱內に溜つて居て、全部を出すことが出來ないやうに感じる。尿其のものも次第に變化する。最初の階段では必ず尿量が多くて、色は靑味を帶び、而して比重は低い。然るに症狀の進むに連れて、尿量は減じて、色は暗黑、而して比重は高くなる。

苦痛。脊髓、背部に苦痛を覺える。或學者は、これが最も頻繁に起り最も苦惱を與へる徵候であると言つた。然し通常の場合に於いては、これは苦痛といふよりも、背部の一點又は脊髓の中央に絕えず感ずる一種のだるい壓迫の感じである。然し大抵の患者は、辛辣な痛苦を受ける方が遙かに增しだと思ふ、それ程これは不快な刺戟を與へるのである。患者は、背部を門柱樣の固體に當てゝ、摩擦するやうな感じを受ける。而して亂暴に背部を

摩擦したり、打ちつけたり、苦痛の部分に所謂反對刺戟劑を與へたりして、多少不快を除去する。此苦痛は、時によつて一局部に限られて、腎臓のあたりばかりが痛むこともある。

循環器的徴候。循環系統に現はれる徴候の中で、最も主要なことは、心臓の鼓動である。脈搏の高くなることである。極めてわづかに精神が興奮しても、肉體が始動しても、其爲めに心臓の影響を受ける。夜間不圖起き上れば心臓の鼓動が忽ち烈しくなる。一分時一〇〇を越えることは常である。而かも脈は小さく間歇的である。

患者は、血液循環が弱く不規則である爲めに、足は往々にして冷え濕つて居ることを感じる。從つて患者は晴れた暖い日にも、靴下を着けて寢なければならぬ。手も足と同樣に冷えて濕つぽく、汗が滲み出て來る。少しの刺戟に會つても赤面したり、時々腦に充血したりする原因は、矢張り循環系統と神經系統とに缺陷のある爲めである。

消化器的徴候。消化器の不良は著しい。食慾は、非常にいゝ時も非常に

悪い時もある。然し消化不良といふ徴候を缺く場合は殆んどない。粘膜を張つた感じのする舌、重苦しい呼吸、胸燒(これは殊に甚だしい。患者は常に胃の中に燃えた石炭が投げ込んであるやうに感ずると言ふ。)便秘、稀には下痢、噯氣など列擧すれば尙ほ足りない位である。

特殊感覺。特殊な感覺に就いて一二を述べて置く。眼は疲れ易い爲め眼病に惱む患者が多い。眼前に點が浮んで見えたりすることは往々にして起る。又、音響に對して敏感となる。自動車の警笛、電車の音、騷々しい音樂、教會の鐘の響、――凡て患者を苦しめるものである。

仕事。症狀が進むと、精神的の仕事も、肉體的の仕事も出來ない。勿論獨創的精神的な仕事をしようとはしない。全然不能なのである。多少でも出來さうに考へられるのは、事務的な仕事だけであるが、然しこれとてもいざとなれば、直ぐに放擲して仕舞ふ。症狀が未だ初期の間は、仕事を上手に熱心にすることも出來る、然し矢張り一時的である。一事を固執して落付いて確實にすることはどうしても出來ない。堪へ續けて仕事をする人で

はいな。況して系統的に研究することの出來る人ではない。

氣分。氣分は極端から極端へと變化する。一寸した愉快な出來事が起つたり希望が見えたりすれば、忽ち有頂天になる。かと思ふと一寸した不快な出來事の爲めに、絶望の底に落されて仕舞ふ。而して平生は常に何事かを怖れて居る。一體何を恐れて居るのか、其恐怖を解剖するやうに、患者に命令すると、勿論説明することは出來ない、只だ彼は何かしら惡いことが起らうとして居る、と心配するだけである。仕事を失ひはしないか、位置を失ひはしないか、競爭者が自分を凌駕しはしないか、家族の者に大きな不幸が見舞はうとしては居ないか、盗賊に襲はれはしないか、自分が逮捕されはしないか――こんな風のことを次から次と空想して恐れる。或場合には、其或恐怖が漠然として捉へどころがない、而かも彼は絶望し狼狽する。其爲めに患者は一般に他人を避ける。

然し症狀の進んで居ない時には、不幸とか、打擊とか、刺戟とか、ある急變などが患者を刺衝して、精力を奪ひ起させることもある。さうした時に周圍

の人は患者の豫想外なる活動に驚くほどである。然し此際は、特に注意しなければならぬ。適當な處置を加へて治療をしなければ、患者は疲勞の狀態に陷るからである。而して疲勞の狀態に陷れば、以前の病狀よりも更に烈しい衰弱に陷るのである。

斯る恐怖の内で最も著しいのは、病氣に罹りはしないかといふ恐怖である。腸窒扶斯、心臟病、殊に脊髓病、心臟痲痺などを恐れる。これは充分に教育を受けて居ない人が、流行の山師的生理書を半讀した時に襲はれ易い、又、知つたふりの友人等から、青年時代の不謹愼が此原因となるのだと説明された時に襲はれ易い。私の經驗中にも「先生、脊髓病でせうか？」と訊かれた場合が頗る多い。而かもさう質問する患者は、全然脊髓病の徵候を現はして居ないのである。其故に私が詳細に説明して、彼の恐怖の馬鹿々々しさを證明してやれば、直ちに彼は生れ變つたやうになる。頭腦の中央から重石を拔き取つたやうに輕快になる。

神經衰弱は時々憂鬱症に似て居る。然し眞の憂鬱症とは區別される。

即ち後者の場合は、何の根據もないのに何々の病氣になつたと怖れて居る。然し神經衰弱の場合は、概して病氣の根據を多少持つて居る、只だ患者が誇張して考へるだけである。言ふに足りない程の輕い徴候をも恐ろしい症狀だと考へ、輕微な不快をも烈しい苦痛だと考へる。恐らく患者の感覺が鋭敏になつて居るのであらう。吾々に無意味と思はれることも、彼には深い意味を持つのである。

其他性的神經衰弱が絶頂に至ると、種々の恐怖を伴つて來る。街路を横切ることの不安、群集に混つて居る不安、劇場に居ることの不安、高所から下を見渡すことの不安などが、常人の想像外に烈しくなるのである。

(附記) 此事を餘りに説き過ぎた。然し現代此症狀はあらゆる文明社會に急激に蔓延しつゝある。而してこれは吾々專門家及び一般識者の最も愼重に考へなければならない重大事であると考へるから、特に詳細に説いたのである。

第十一章　生殖不能

生殖不能、即ち不姙性とは、子供を持つことの出來ないことである。此缺陷は男性にもあり、女性にもあり、時には兩性共に持つて居る。昔は一切の罪を女性だけが負はされて居た爲めに、結婚して子供の生れない時は、女性が非難された。然るに現代では凡てが明瞭になつて、多くの場合非難さるべきは女性でなく、却つて男性であることを知つた。

男性は女性を姙娠させる爲めに、健全な精液と其射出作用とを具備しなければならぬ。精巣に影響を來す病氣、其爲めに精液が其特殊な性質を失ふ場合、或は輸精管の障害となる病氣、其爲めに精液が表面に射出されない場合、――かうした場合は凡て生殖不能である。又、精巣缺乏、精巣懸留(精巣が股部に留まつて陰囊中に下降しない)等の場合、或は手術で精巣を移動したり除去したりした場合、或は黴毒などの爲めに精巣が破壞された場合――かうした場合も亦生殖不能である。生殖不能の原因中、先づ特に擧げなけ

ればならないのは彼の耳下腺炎である。耳下腺炎は、耳下腺(耳の傍にある)の炎症であるが、其耳下腺が生殖器と特別な不思議な關係を持つて居る。而して耳下腺炎になれば、精巣が肥大して痛衝する。其爲め子供の時代に耳下腺炎に襲はれて、生涯、生殖不能に陥る例が屢〻ある。

輸精管の障害は、概して痳病から生起する。而して此痳病は、生殖不能の根本的原因である。(女性にあつても痳病は不妊の重要原因である。)或場合には精巣に異常が認められないで、而かも精液を生じない。精液は生じても精子を含有して居ない。精子を含有して居るとしても、極めて其數が少ない。たとひ其數が多くあるとしても、死滅して何等活動力を持つて居ない。——これ等の精液又は精子の缺陥は、とりも直さず生殖不能の原因である。

攝護腺の疾病、精嚢の疾病なども亦生殖不能の原因である。攝護腺の分泌液(既に説明した)は、精液の一部となつて、精子に活動力を與へるものであると考へられて居る。それ故に攝護腺の分泌液の缺乏する場合、又はこれ

が濃汁を含有し居る場合など、精子は有害な影響を受ける。精嚢の場合にも同樣のことが言へる。

尿道狹窄も生殖不能の原因となる。精液の射出を妨害するからである。精液は體外に出でないで、膀胱に向けて進入する。

以上列擧した以外にも尙ほ幾多の條件がある。然し非常に稀であるから特に重大視するに及ばない。此處に私の擧げただけが、最も起り易く赤最も重大な例である。

生殖不能の多くの場合は、治癒することの出來るものであるが、中にはどうにも出來ないものがある。例へば精巣の除去又は破壞、或は先天的缺乏などである。然し炎症、障害などは加療して全癒される。但し熟練した專門家の手腕に委せなければならぬ。

第十二章　花柳病

花柳病は、主として男女の接觸に依つて傳染される。種類を痲病、黴毒、軟性下疳に分ける。その中で、痲病は最も普通、最も蔓延して居る。最も恐るべきは黴毒である。痲病と黴毒とに比較すれば、軟性下疳はそれ程重大視されない。

痲病と黴毒、此二つは人類の最大不幸である。若し最初から此二つが人類に存して居なかつたならば、人類の面目は非常に變つたものになつたのであらう。現在よりも更に健全、更に完全、更に明瞭、更に正氣なものであつたに違ひない。而して更に一般が幸福であつたに違ひない。然し私は確信する、早晩花柳病が人類を破壞しなくなり、やがては世界の表面から完全に姿を隱す時が來るに相違ないと。

花柳病は非常に恐るべきものである。それには全然誇張が含まれて居ない。然るに世の中には、害惡を言ふ爲めに大袈裟にならないで居れない

人々がある。青年を花柳病の恐るべき害惡から免れさせる爲めの奇特な精神を持つて居ながら、而かも大袈裟な誇張を用ゐるのである。例へば私は、青年中の百分の八十乃至九十が痲病に犯されて居ると、或學者の云つたことを覺えて居る。或は百分の二十五乃至五十が黴毒に犯されて居る、更に娼婦に至つては全部百分の百が痲病か黴毒かに犯されて居る――世間にはかう言ふ學者がある。讀者も恐らく讀んだことであらうが、痲病は不治の疾病である、一度痲病となれば生涯痲病に惱まされると說く學者がある。更に結婚婦人の百分の六十は痲病であり、婦人の手術中、百分の六十乃至九十は、夫から感染した痲病であると言ふ。然し此說は眞實とは言へない、極端な誇張である。事實を言へば、百分の二十乃至二十五が痲病に犯され、百分の二乃至五が黴毒に犯される。娼婦の中には生涯を通じ痲病にも黴毒にも感染しない者が多勢ある。痲病は完全に治癒することが出來る、最初から適當な方法を用ゐたならば、數日にして全癒する。結婚婦人の百分比など極めて少さい、(恐らく百分の二から三位に止るだらう)、夫から(感染

する花柳病が百分の六十などに達するものではない。

然しそれにしても花柳病は實に恐るべきものである。これを治癒する爲めには、あらゆる方法と全力を盡して試みなければならぬ。若し諸君が痳病なり黴毒なりに感染したとせよ、たとひ世間の百分比が六十であらうと五であらうと、結局同じことではないか、只だ諸君は不幸となり慘めとなるであらう。諸君の一生は破壞され、寧ろ生れなかつたことを幸福としなければならぬ。それ故に諸君は出來るだけの努力をして花柳病を防止し、又如何なる犧牲を拂つてもそれには代へられない。先づ多くの場合、花柳病の傳染は男女の接觸に依るものであるから、豫防法の根本は、花柳病を持つかどうか疑はしい女性とは接觸しないことである。多分大丈夫だらうと想像するだけの女性には觸れないがいゝ。諸君は注意して機會を避けなければならぬ。一旦感染した後で、其ことを悔恨しても、既に取り返しのつかないことである。

然し、若し諸君の性欲が非常に強くて制し難い程(或は制し難いと思ふ程)

であり、且つ事情があつて花柳病の有無を知らない女性に接觸しなければならない場合があるとすれば、其時は豫防法を適用すべきである。特別に注意された花柳病豫防法は、其傳染を防止するに役立つのである。今日に於ては、陸海軍部内にも盛んに應用せられて、花柳病の勢力を驅逐して居る。私は此豫防法が廣く適用されたならば、良好な結果を得たゞらうと思ふ。現代のやうに廿八歳、卅歳、卅五歳位になつて漸く結婚する時代では、青年の悉くが結婚前まで童貞を守ることは不可能である。——私はかう思うと同時に、淋病と黴毒とは、禁を犯した接觸の罰としては餘りに不當であると思ふ。それ故に、完全に正確であり、完全に道德的である、花柳病豫防を講じたいのである。何等の豫防法をも盡さないで、將來の妻子にまで害毒を及ぼす恐るべき花柳病の危險を、敢て冒すことは、實に不道德と言ふべきである。勿論諸君が不正の接觸をしないで居るならば、それは實に結構なことである、然し性慾を抑制することの出來ない場合、若し諸君にさういふ場合があるならば、次章に述べる豫防法を適宜用ゐるがいゝ。

第十三章　花柳病豫防

花柳病豫防の第一の原則とも言ふべきは、生殖器を常に清潔に保つことである。生殖器を碌々洗はないで、包皮下に内面汚垢を蓄める者は、病毒の感染を免れない。包皮を反轉させ、龜頭を石鹼と水とを以てよく洗滌する、而して乾かして居なければならぬ。若し擦傷したやうであれば、酒精(酒精一、水三の割合)を以て洗ふか、五パーセントの明礬水で洗ふ。勿論交接して擦過傷を負ふとか、切目が出來るとかした時は、直ちに醫師の相談に委すべきである。

包皮切斷(古來割禮と稱したるもの)は最も肝要な豫防法である。包皮を截去した者は截去しない者よりも遙かに花柳病に感染しない。包莖の場合には龜頭と包皮との間に汚物を殘留して、疾病の誘因となり易い。軟性下疳、痳病など截去して豫防すれば非常に效果がある。

包皮切斷の問題は極めて緊要な問題である、實際經驗を經た此方面の專

門家は、多くそれを衞生的方法と認めて居る。リドストン博士はかう言つてゐる。

「包皮切斷卽ち割禮の起原は古來宗教上の儀式として用ゐられたことから始まる。(これは他の宗教的儀式と同じく、健康維持の根據を持つて居た。)現在でも猶太人、回々教徒として知られた種族の間には矢張り行はれて居る、濠洲の土人も行ふ。此點から推論して濠洲の土人の祖先は、イスラエル人だらうと言ふ人類學者も居る。然し此說は餘りに空想的で眞理ではあるまいと思はれる。阿弗利加の土人なども同じやうに、此濠洲の土人も亦生殖器崇拜の痕跡を示して居るので、その爲めに割禮を儀式用としたのである。」

割禮は最も感心していゝ習慣である。宗教的信仰を異にした何人でも、モーゼ(モーゼでなくとも割禮の儀式を案出した人ならば誰でもいゝ)を衞生家であつた、と認めるに違ひない。猶太人は多くの點で、社會的衞生家であつた、而して次第に猶太人でない種族までが模倣し始めた。彼等の宗教

的儀式の内で、其割禮だけが意味のある儀式であつた。

割禮は清潔を保つて、疾病を豫防することに役立つ。局部の過敏性を輕減し、性慾の感應性を緩和する。而して手淫などの不自然な行爲を矯正するに役立つ。

時早く包皮を切斷すれば、局部の適當な發達を見ることは醫師の凡てが觀察する事實で、猶太人は大抵猶太人以外の者よりも生殖器が發達して居る。異常を示して居る場合が少ない。彼等の驚くに定る程の精力と忍耐とは、恐らく此割禮の習慣に負つて居るのであらう。現在吾々の眼前には、此精力と忍耐とを持つた驚くべき種族、猶太人が存在して、其經驗と實例とを示して居る。然るに猶太人以外の人間が殆んど、割禮の風習を等閑に附して、其衛生に適したことを知らないのは實に不可思議といふべきではないか。

元來包皮なるものは、人類の進化に連れて、其作用の必要を失つたものである。嘗ては龜頭を蔽つて保護する爲めに必要なものであつたかも知れない。然し今日の吾々にとつては、原始人には原始人以前の種族が缺くべからざるものと考へて居た程に意味のあるものではない、却つて截去する方が、上述の理由に依つて效果が多いのである。

最も簡便にして而かも多くの場合有效な豫防の方法が唯一つある。それは交接後、直ちに排尿することである。これ以外の豫防法を全然顧みないにも拘はらず、嘗て感染したことのない人がある、これは尿が器械的に傳染性物質を體外に洗滌し出すからである。其上に尿は酸性反應を持つて居て、痲菌を中和する。それ故に膀胱内には尿を蓄へて置いて、交接後、直ちに排尿すべきである。(交接前に排尿してはいけない、成るべく水を飲むがいゝ)即ち先づ厠に立つて尿道を壓縮する。而して突然排尿する。かうすれば尿道は膨脹して、尿は烈しい勢を以て迸り出る、而して遺憾なく有效に尿道を洗滌するのである。

コンドム。コンドムに依る豫防法は、最も古くから用ゐられ、而かも最も簡單であると同時に最も完全に痲病を防止する。器械的の包裝或は鞘(サヤ)と

いふべきもので、最初コンドム博士が發明した。博士は此發明だけを以ても、人類の恩人と稱されるべきである。實に此發明以後、幾百萬の人間が恐るべき痳病に犯されないで濟んだ。ベルリンのブラッシュコ教授は、公開の席上で、コンドム博士の恩を感謝して述べた。博士は紀念碑を建てるに相當するだけの功勞があつた。若し博士のあの小さな發明がなかつたとしたならば、恐らく今日までに人類の凡ては花柳病化されて居たであらうと。

コンドムは二種の材料で作られる。護謨と羊腸とである。何れも一利あつて一害ある。護謨製は柔軟にして伸縮自在、且つ密着して容易に外れない長所を持つ。然し植物性材料の常として感觸の具合が惡くて、交接の快感を非常に殺ぐ。人によつては、勃起乃至射精に差支へる者さへある。コンドムを使用する位なら交接をしない方が增しだと云ふ程嫌ふ者さへある。然るに羊腸製は交接そのものゝ動作を妨害する點では、比較的長所を持つて居る。然し護謨のやうに伸縮自在でなく、其上、使用前に濕さなければならない缺點がある。勿論コンドムを買ふ時は、最良の種類を選んで

清水を以て完全に洗滌して置く。質のいゝコンドムは、一度ならず使用されるものである。但しそれには一旦使用後直ちに清潔にし、消毒を施さなくてはならぬ。水を濺いで丁寧に洗滌した後、一時間乃至二時間位、消毒用の昇汞水の中に浸す。而して取出した上、よく乾かして紗の片に捲き込んで置くのである。

コンドムと黴毒。然しコンドムは痳病を豫防する效力あるのみで、黴毒に對しては全然無効である。私の經驗中にも、コンドムを使用しながら黴毒に感染したと言ふ多くの患者に會つた。接吻などの爲めに感染するのは勿論であるが、その意味ではない。陰莖の根、陰囊の表面などにも感染するといふ意味である。陰莖の一部分丈けを包むコンドムの無效は寧ろ當然のことゝ云はなければならぬ。

化學的藥劑。最も簡便清潔な化學的藥劑は、五千倍の昇汞水である。昇汞水を詰めた小壜を常に身邊に用意して、脫脂綿の一片に含ませながら局部を一面に拭ひ、尿道には二三滴を落す。或人は私にかう語つた、——數年

來此方法を用ゐたが結果は良好で、嘗て疾病に見舞はれないと。事實これは清潔、安價、其上に衣服を汚さない。然し或る人は昇汞水其ものゝ刺戟によつて、陰莖や尿道に痛みを受けたことがある。

プロタルゴール及びアルヂロールは廣く一般に用ゐられて有效である。プロタルゴールは百分の五乃至十の溶液を數滴、アルヂロールは百分の二十の溶液を數滴、共に數分間尿道の中に注入する。

硝酸銀も効力がある。然し餘りに刺戟し易いので、私は採らない。

以上に說いた花柳病豫防方法は積極的方法だけである。更に二三の消極的方法を用ゐなければ、完全を期することが出來ない。爲すべきことが幾つかあり、爲すべからざることが幾つかある。其中、肝要なのは、爲すべからざることである。先づ酒類は一切禁じなければならぬ。酒精は花柳病の味方である、結果は二重に惡い。——理性の力を弱め、意志を痲痺させる。その結果は謹愼を失つて、平生は見向きもしないやうな怪しい女に戲れる。

そして、其揚句、數時間も前後不覺に眠つて、上述の豫防法を應用する機會をも失つてしまふ、こんなことが始終行はれることになる。そればかりではない、酒は、更に尿道を充血させて、花柳病菌の侵入を容易ならしめるのである。若し酒精飲料を禁じたならば、人間の性慾生活に秩序を生じ、花柳病の率は忽ち減ずるだらうと思ふ。

交接の時間は長引かせてはいけない、必要もないのに長くするのは有害である。相手の女性が特に豫防藥を用ゐて居ない限り、交接を二度以上繰返してはならない。

これだけでも理解し得たやうに、花柳病豫防には特に近道といふものはない。病氣に見舞はれないやうに祈つて見たところで何の効果もない。必要だけの注意はどうしても行はねばならないし、必要だけの面倒はどうしても履まなければならぬ。それを怠れば、當然の應報として感染する。然し花柳病豫防といふ大きな利得に對して、それ位の注意と面倒とは、僅かな犧牲ではないか。

以上を一口に言ふ。――花柳病豫防の爲めには、先づ生殖器を清潔にして常に健全な狀態に保たなければならぬ。良質のコンドムは、現代に於て兎に角、最も確實な最も簡單な豫防方法である。或る人にとつてはコンドムが、勃起と射精とに差支へを來し、同時に恍惚狀態の快感を殺ぐかも知れないが、それさへ使用すれば他の方法を顧みる必要がない。交接後は直ちに排尿する、而して尿道にプロタルゴール、アルヂロールの溶液、或は薄い水銀軟膏で局部を摩擦する。女性は交接の前後共に豫防藥を挿入しなければならぬ。酒類は一切避ける、交接の時間は長引かせない。――これ丈を注意して守らなければならぬ。

花柳病、殊に黴毒は單に生殖行爲だけに依つて傳染するものではないから、他に二三注意しなければならぬことがある。

公衆用のコップを用ゐないがいゝ。然し用ゐなければならない場合は、コップの緣に唇を觸れないで飲むことにする。

公衆用の手拭は用ゐてはならぬ。

旅館又は他人の家に泊つた時、寢床の敷布は清潔かどうか調べる、知らない人の寢布の上には消毒後でなければ寢ないがいゝ。

理髮屋を避ける。鬚は自分で剃ることにする。然し理髮屋の手に掛ける場合には、其手が清潔であるかどうか、剃刀が消毒してあるかどうかを確かめる。(私は嘗て理髮屋の手に一種黴毒やうの發疹が生じて居たのを見た、而かも彼は平氣で剃刀を動かして居た、)ブラッシュは常に自分用のものを用ゐる。公衆用のブラッシュ又は櫛を使つてはいけない。

若し齒科醫に掛かれば、其齒科醫は注意深い新人であるかどうか、使用する機械は消毒濟かどうかを確かめなければならない。黴毒は屢、齒科醫の機械から傳染する。黴毒患者が齒を痛めて齒科醫に掛つた場合、大抵黴毒の有無を口にしない、それ故に齒科醫は一々機械を消毒しないで他の患者に接すれば、忽ち傳染の媒介となるのである。

誰彼の差別なく接吻してはいけない。接吻は非常に危險である。黴毒

患者の發疹が唇の附近に生じ、それが接吻によつて忽ち他人に傳染する。黴毒の傳播は接吻を媒介とすることが極めて多い事實を忘れてはならない。

以上、花柳病豫防に就いて寧ろ詳細に說き過ぎた。若し諸君の中で、何かの理由があつて此豫防法を用ゐなかつた爲め、或は不注意で用ゐた爲め、遂に不幸にも花柳病に罹つた人があるとする。其時諸君はどう處置すべきであらうか。此場合、最も適當にして賢明な處置は、先づ諸君の兩親に、かゝる行爲を白狀することである。さうすれば兩親は(物の解つた兩親であつたならば)叱つたり罰したりしないで(或は罰することは後に延ばして)、直ちに諸君を專門醫の許に連れて行くであらう。醫師は直ちに診察して滿足に治癒して呉れる。然し若し諸君が白狀する爲めに兩親を持つて居ないか、或はたとひ持つて居ても白狀することを恐れる場合には、(こんな兩親ならば持たないも同樣である)誰かに相談して、專門醫を敎へて貰ふがいゝ。諸君の一生、諸君の將來に關する大問題であるから、賣藥などの手療治をし

てはいけない、所謂經驗のあるといふ友人の手に委してはいけない、廣告に巧妙な山師的の醫師の許に赴いてはいけない、此處で不注意すれば一生の損失である。極めて巧妙な、極めて誠實な、極めて經驗のある專門醫でさへも、痳病乃至黴毒を完全に治癒することの出來ない場合がある。それを怪しい賣藥だの、素人だの、友人だの、山師の醫師だのが、どうして治癒すると言ふのだらう。結果は明瞭ではないか。專門醫以外の者が、花柳病の處置をするは、寧ろ罪惡として非難すべきである。

花柳病の性質、其經過、其徵候――次にはこれを知る必要がある。痳病、黴毒、軟性下疳を各章に分類して、以下說くことにする。

第十四章　痲病

痲病は尿道の疾病で、病原菌はゴノコッケンと稱する細菌である。千八百七十九年、ブレスラウのナイセル教授に依つて初めて發見された。

菌は極めて微小である。高度の顯微鏡を用ゐ、特殊な色彩を加へて漸く認められる。急性痲病の絶頂には、幾千萬となく排出する膿汁中に含まれる。形狀は珈琲豆に似て、二箇或は二箇の倍數をなして群つてゐる、卽ち四、八、十六といふ具合である。但し尿道から排出される膿汁の凡てが痲菌ではない、肉眼を以ては凡て同樣に見えるが、顯微鏡下に於ては、痲菌の場合と普通の加答兒の場合とで著しい相違がある。それ故顯微鏡を用ゐない醫師、又其用法を知らない醫師は、到底患者の症狀を完全に判定することが出來ない筈である。

痲病に罹つて居る女と接觸したとする。彼は直ぐには徵候を現はさない。痲菌は潛伏して居るからである。ある一定の時間を經て菌は成長し

發達する。其潛伏期間は、場合に依つて相違するが、大抵三日乃至五日である。つまり、感染してから徵候を現はすまでに、それだけの日數を要する譯である。それまでは勿論患者の身體に些の變化も生じない、然るに三日乃至五日を經た頃になつて、患者は尿道にある異常を感ずる。尿道に燃えるやうなチカ〳〵する刺戟を感ずる。陰莖を仔細に檢査して見れば、尿道管が多少脹れて赤味を帶びて居ることを知る。これが最初で、十二時間乃至四十八時間續く。而して次に急性狀態――痲病の著しい徵候が現はれて來る。膿汁が出る、それも最初は小量で白色に近いが、次第に量を增して來る、色は黃色に變つて絕えず慘むやうに出る。此時になつて適當なる處置を施さないで置けば、更に症狀は險惡となる。尿道孔の緣は稍〻腐蝕して龜頭と包皮とは赤く脹れる。而して尿道全體が感じ易くなつて、苦痛を覺える。排尿が困難になつて、通尿中爛れるやうな痛みを覺える。其爲め患者は出來る丈け排尿の度を少なくし樣とする。陰莖全體が熱を持つて多少脹れる。此一定の期間が一週間乃至二週間持續すれば、急性狀態は一週間

か十日間位で終り、膿汁は少なくなり、排尿も比較的容易となり、遂に大した變化もなくて最後の狀態になる。かうなつて仕舞へば徵候は著しく減少して、膿汁も次第に出なくなる。而して二三週間の裡に、痲病の徵候は完全に消滅する。卽ち最初の徵候が現はれてから、五週間乃至六週間の後である。

以上は急性痲病の普通の症狀である。然るに若し菌が尿道の奥にまで侵入したならば、(而かも大抵の痲病は奥まで冒される)他に著しい二つの違つた徵候が現はれて患者を惱ます。二つの徵候とは、排尿の困難卽ち日中、幾分間毎に排尿したくなることゝ(夜中も數回起きなければならぬ)排尿後の甚だしい苦痛とである、勿論上述の表面的痲病の場合でも排尿に苦痛を伴ふが、其程度は殆んど比較にならない、而して殊に此場合の特徵とすべきは、最後の數滴が尿道を通過する間に實に烈しい辛痛を覺えることである。

此處で諸君に深く注意したいことがある。それは痲病の膿汁の傳染性

に就いてゞある。膿汁の一滴が誤つて指に附いたとする、而して其指が眼球に觸れたとすれば、屢、眼痲になる。眼痲に罹れば大抵は失明する、卽ち生涯不幸な盲人となるのである。幾千の子供が眼痲の爲めに生れながらにして兩眼の明を失ふ。母胎からこの世界に第一歩を踏み出した時、母の持つた痲病菌が、其頑是ない子供の眼球を犯し、終に盲人にして仕舞ふのである。それ故に膿汁には極めて注意すべきものであつて、若し何かの過失から指に附着することでもあれば、直ちに消毒液を以て洗滌しなければならぬ。

痲病の經過は、種々の關係に依つて相違する。襲來の害毒の程度、傳染の程度、患者の肉體の强弱、其經濟上の關係、其勤務の狀態等に依つて相違する。更に醫師の熟練と經驗(これが最も肝要である)とに依つて相違する。それ等種々の關係が悉く申分のない場合、其時は五週間乃至六週間の間に、完全に治癒する、勿論其後徵候の現はれることはない。「一度痲病に罹れば一生それに惱む」といふ說は誤謬である。私の知人は青年時代を痲病に苦しん

だが、後に完全に治癒して結婚した。然るに妻にも感染することなく、壯健な美しい子供の親となつて圓滿な家庭を送つて居る。私の知つて居る範圍内でも、此種の實例は幾百と數へ切れない。それ故に、痳病不治といふ俗說は全然取るに足りないのである。然し周圍の事情が惡くて、例へば直ぐに醫師に相談しないで賣藥で治さうと試みたり、素人の友人の手療治を受けたり、無理に仕事を續けたり、不注意不熟練な醫師に賴つたりなどすれば、結果は反對に險惡になつて慢性痳病となる、恐るべき害毒は攝護腺、精嚢、精巢などにも及んで、治癒するに數年月を要するのみか、場合に依れば、永久に治癒することが出來ないのである。

痳病の處置に就いて、此處では注入劑などの醫師の手に屬すべきことを述べない。賢明な人ならば、自分で手療治をしないだらうと信ずるから、其必要がないのである。

一般的方法。痳病處置の一般的方法は一語に盡される。「事を容易に運

ぶこと」である。患者は出來ることなら自宅に蟄居するがいゝ、然し現代の經濟的社會の狀態では、痳病に罹つたからとの理由で、自宅に蟄居する譯に行かない。そんな人は恐らく百人に一人も無いであらう。大抵の人は職業を失ひはしないか、位置を失ひはしないか、兩親だの妻子だのに露顯しはしないかなどゝ心配する樣な位置にある。それ故に只だ出來るだけの範圍で最上の方法を採るがいゝ。成るべくは、長く佇立しないやうにし、成るべく歩くことや、乘ることやを少なくする。殊に物を持ち上げることを避け、舞踏、乘馬、自轉車等の遊戯を避ける。汽車、自働車などの旅行も、急性痳病には非常に有害である。

交接中止。交接は此病期間中は中止すべきで、如何なる場合でも行つてはならない。

食物。日常の食物は適度にしなければならぬ。痳病患者に限り特に食物を制する必要は認めないから、平生の食物に從つていゝ、但し香料、藥味、辛味、酸味などを帶びた食物は採らないやうにするがいゝ。

飲料。酒類一切は嚴禁。珈琲も成るべく避ける方がいゝ、生殖器を刺戟するからである。然し薄い茶ならば用ゐてもいゝ。急性痲病に最も有效な飲料は、牛乳と水とである。炭酸水は絶對に不可である。

其他注意すべきことが二つある。それは患者の腸と浴湯とのことである。患者は常に心掛けて便秘しないやうにしなければならぬ。便秘は急性痲病に不良な結果を與へるからである。浴湯に就いては微溫を避けて成るべく高熱を取る、そして尿道を洗滌した湯が眼球を犯さないやうに注意しなければならない。

陰莖に觸れた手は其度毎に洗はなければならぬ。さうした必要な事項を書いた小紙片を、醫師なり藥劑師なりが、患者に渡すやうにするといゝ、これは單に危險を防止するのみではなく、又時間の經濟である。

第十五章　黴毒

黴毒――實に恐怖と嫌厭とを與へる名である。幾世紀に亙つて、それは人類の苛責として害毒を擅まにした。あらゆる識者乃至新聞雜誌が、嘗て黴毒といふ言葉を公表したことがない。これは常に別世界として沈默に支配されて來たのである。

最近に至るまで新聞雜誌は、黴毒に關する記事を掲げたことがなかつた。醫師は、其恐るべき害毒を知りながら、又著述なり講演なりに依つて一般に知識を普及することが義務であると考へながら、未だ沈默の域から脫することが出來なかつた。

然るに現代に至つて、此點の非常に變化したことを吾々は感謝しなければならぬ。今日の新聞雜誌の中には、最早黴毒といふ言葉を記すに恐れる者は少ない、而して花柳病の性質と害毒とを、廣く青年に普及する事は、當然許さるべきであり、又しなければならない義務となつた。

黴毒は如何にして感染するかといふと、これには二つの道がある。即ち直接と間接とである。其中、大抵の場合は、直接の媒介、言ふまでもなく、黴毒を持つた人間と相接觸することに依つて感染するのである。

間接に感染する場合は、コップ、寢具、器具、鉛筆、楊子などを媒介とする。これは屢、見る現象で、黴毒患者としては最も悲慘である。彼等は直接、異性に接觸して感染したのではない。何も知らない、何も豫期しない間に、何時か恐るべき病毒に犯されて居るのである。

父母の遺傳に依る遺傳黴毒と稱するものがある。單に父親のみが黴毒に罹つて居たとすれば、往々にして病毒を免れる。然し母親が黴毒に罹つて居たとすれば、多くの場合に免れることが出來ない、更に父母共に黴毒を持つて居れば、免れることは絶對にないのである。然し遺傳性黴毒は項を別にして說くことにする。

黴毒の經過、これは通常、第一期、第二期、第三期と分類される。此分類法は世界で有名な黴毒學者、リコール氏の發案であるが、常に眞理とは言へない。

例へば明らかに第三期の變調として分類されたことが、事實は第三期に起つたり、第二期の變調として分類されたことが、反對に第三期に起ることもあるからである。然し兎に角、此分類は非常に便利であるが爲めに、矢張り保存されて居る。正確に言へば、各期の間に鮮やかな分界線が劃されて居ないのである。

第一期。第一期の中を更に二期に分類する。第一期は感染から初期黴毒の腫物の現はれる時まで、即ち潛伏期の稱、即ち普通十四日間から廿一日間を言ふ。但しこの期間は場合に依つて著しく相違し、十日間位の短期の場合もあれば、四十日間、五十日間の長期もある。フォウルニェルは、七十日間の異例をみたと報告して居る。第二期は、(勿論第一期中の第二期の意味)初期黴毒の腫物が現はれてから次の發疹の生ずるまで、即ち顯出期の稱であつて、普通六週間を言ふ。但し此期間も亦一致してゐない、ある時は三週間になり、ある時は三ヶ月にも及ぶことがある。

一期黴毒の變調、即ち徵候は、局部に生ずる結節狀の腫物又は淋巴腺に生

ずる横痃である。(横痃は解剖して見る時は、腫物と密接な關係を打つて居る。)

第二期。第二期は前期六週間(但し上記の通り三週間の場合もあり、三ヶ月の場合もある)の過ぎて後に現はれるもの、卽ち皮膚及び粘膜に現はれる變調である。種々の發疹、腫瘍を皮膚及び粘膜の表面に生じ、頭髮を落脫し、各腺を腫張し、眼球に影響を及ぼすなどを特徵とする。此期間は一般に一二年を持續し、特に一定の期限がない。何故ならば、感染の度合、生活の樣式、患者の體質などの異るに從つて、この間の長短も異るからである。

第三期。第三期に至つては、單に身體の表面のみに止まつて居ないで、漸次內部に病毒が侵入して來る。多種多樣な潰瘍、骨髓の影響、內臟、神經、頭腦、血管などの侵害である。此期間の現はれるのは、最初の感染から一ヶ年乃至二ヶ年(普通は二ヶ年)の後であり、持續するは二十年乃至三十年間である。往々にして患者は、黴毒を抱いたまゝ死ぬ者もある。以下此時期に從つて、其徵候を述べよう。

第一期變調。第一期黴毒の特徵は、腫物である。此腫物の特徵は硬質の點にある。其硬度は殆んど軟骨位の程度である。それ故に、若し腫物が硬質であり各腺が腫張し、病毒潛伏の期間が明瞭になれば、診斷するに些の困難を感じない。然し黴毒の特徵は必ずしも、かく明瞭に現はれるものではない。眞にスピロヘータ・パリーダが存在するかどうかを發見しなければ確實な斷定を許さないのである。

スピロヘータ・パリーダとは如何なるものか。これこそ黴毒の根本原因となる黴菌である。原始生物に屬する極めて微小なる有機體で、形狀は螺旋狀、恰も拔栓に似て居る、而して屢、幾通りにも變化する、細い自在な動物である。極めて高度の顯微鏡の力を借りて初めて認めることが出來る。此處に注意すべきことは、パリーダと形狀が殆んど同じ細菌で、スピロヘータ・レフリンゲンと稱するものがある。これを往々にして無經驗な醫師が前者と見誤るのである。然しレフリンゲンの方はパリーダよりも農厚であり、螺旋がより長く、より少ない、而して色も一層鮮やかである。若し顯微鏡

下に二個を竝べて見れば、何人でも容易に識別することが來る。

スピロヘータ・パリーダ發見の名譽は、伯林のシャウヂン及びホリマン兩氏に負ふところである。それは千九百〇五年のことであつた、著者は幸にも伯林醫學協會に於ける、其發表の席に親しく參列して、其顯微鏡と幻燈との說明を見ることが出來た。兩氏の發見に對しては、最初の內こそ疑惑も持たれ、反對も唱へられたが、次第に確實な眞理として全世界に認めらゝるに至つた。今日では勿論此說に異議を挿む學者は一人も居ない。

第二期變調。第一期の現はれてから六週間(但し上記の通り必ずしも六週間とは斷言されない)を經て現はれる。而して一二年間繼續する。皮膚及び粘膜に腫瘍を生ずるのである。最初は極めて微小な紅疹を皮膚に現はす。患者自身には殆んど見分けられない程の微小發疹であるが、經驗ある醫師ならば直ちに識別することが出來る。此紅疹が皮膚の全體を蔽ふか又は胴部丈けか、腕の前面丈けかを蔽ふ。而かも皮膚の表面に腫れ上つ

て居ないから、觸れた感じはない、只だ漸く見得るだけである。其內に、次第に皮膚に隆起する他の丘疹を生じて、觸れた感じを受けることが出來る。

黴毒の最初の發疹には、多少の熱を伴ふものである。而して患者は一般に身體の倦怠を感じ、骨骼、殊に足、肋骨などに苦痛を覺える。此苦痛は常に夕暮から夜にかけて甚だしくなる。夜間に痛むといふことが、黴毒の著しい特徵と認められる。

發疹が現はれると同時に、或は稍ゝ遲れて咽喉の苦痛を訴へる。扁桃腺、舌、頰、唇などにも輕い苦痛を覺える。これ卽ち粘膜の黴毒性炎で、皮膚表面の腫瘍と同樣、傳染性を帶びて居る。

此時期になれば、多くの場合、頭髮は脫落する。脫落にも二樣あつて、頭髮全體が薄くなつて剝げる場合と、特に一ヶ所が鼠にでも喰はれたやうに剝げる場合とある。此毛髮脫落は、黴毒特徵の著しい點と認められる。而して此種の禿頭は、毛根中に生ずる毛乳頭の消失に依るものであるから、脫落後再び毛髮の生ずることがない。

虹彩炎(瞳孔の周圍を虹彩といふ)も亦二期黴毒の徴候である。これは通常紅疹を伴ふ。適當な治療法を加へる時は、二週間乃至十週間位の間に、何等の障害をも殘さないで、完全に治癒するものである。然しこれも屢〻起ると、遂には視力を傷つけ、或は盲目の憂目を見る。

第三期變調。第三期に至つては、黴毒が全體に瀰蔓する。何れの部分も(内外共に)侵されない處はなくなる。腦、脊髄、心臓、肝臓、脾臓、腎臓、骨、勒帶、腕、足等、至るところに潰瘍を生ずる。鼻軟骨を侵害し、時に依れば、これを潰滅する。患者の外貌は一變して恐怖の相を帶び、顎の軟骨、硬骨、會厭軟骨など孔を穿たれて、飲食、談話にも差支へる。陰莖、精巣は破壞され、胃、腎臓、膀胱は機能を失ふ。——一口に言へば、人間の身體中にある組織、器官にして、此恐るべき黴毒の破壞を蒙らないものはない。殊に昔の第三期黴毒患者の悲慘は到底筆紙に盡し難い。現今吾々は進歩した科學の力に依つて比較的、黴毒患者救濟の實を擧げて居る。過去に屢〻見られたやうな悲慘な實例に接す

ることは殆んど稀である。事實、多くの患者が、第三期に陥るを免れて居る。これは、現代の醫學の進歩に大部分據るものであるが、同時に、患者自身が早く醫師の診察を乞ふこと、一般に社會の經濟狀態がよくなつたこと、花柳病の害毒を知つたこと、治癒衛生の必要を感じたことなどにも基くのである。世人は全體として清潔になつた、知識も增して來た、醫師の命令にも忠實に賢明に從ふやうになつた。それだけ花柳病患者の率は減少しつゝあるのである。

脊髄病及び一般痲痺狂。黴毒から生ずる特殊な疾病、脊髄病と痲痺狂とは一言する必要がある。時に異例はあつても、これは殆んど多くの場合黴毒から生ずるものである。

脊髄病の起るのは黴毒の感染後二十年乃至三十年の後である。脊髄の硬化した爲めに徐々に運動不隨を招くものである。患者は特殊な痙攣的な動作しか出來ない。恰も重い物を曳きずつて歩くやうに見える。從つ

て運動不隨を覺え、歩行しようとする時は、特に足を高く持ち上げて、遙か向うに投げ出さなければならない。若し眼を閉ぢれば、自分の足が何處にあるか判然しない。何かに凭れ掛けて居なければ佇立して居ることが出來ない。小刀で刺すやうな苦痛を胃に覺える。鐵帶で締めるやうな苦痛を腹に覺える――これが亦脊髄病の特徴である。此狀態が二三年乃至十年廿年位(場合によつて定まらない)續いて、次に最後の狀態が來る。患者は尿便を制することが出來なくなる、一切の動作が不可能になる。患者自身にとつても周圍の人々にとつても、一個の厄介な重荷となる、而して無益な生よりも寧ろ死を願ふやうになる。死は此悲慘な狀態から患者を救つて呉れるからである。

脊髄病の治療法は、最近まで不滿足なものばかりであつた。從つて結果は悲觀すべきものであつた。然し近年、脊髄に注射する療法が試みられてから、多少樂觀すべき結果となつた。然し要するに、確實な療法は、現代の學界に求められないのである。

痲痺狂は、頭腦の軟化、脊髄の衰頽に依つて起る。此患者は、次第に精神を失つて來る。――先づ最初は偏狹となり、次に白痴になつて、最後に狂氣となる。患者は、痲痺狂に罹つてから後三年位で狂死する。實は二年も生きて居ることが悲慘である、彼自身の爲めにも友人親戚などの爲めにも、三日位で死ぬる方がどれ程幸福か知れない。世の中で最も悲慘の光景は、痲痺狂患者を見ることである。苦痛なき死を與へること、――寧ろこれが患者に對する親切といふべきであらう。苦しみ悶へ、疲憊して遂に死に至るまで放擲して置くことは(生かして置くことは)實に慘酷の極みといふべきである。

痲痺狂に對する治療方法は一つもはい。最近一部に唱へられる注射療法も、事實何等の效果を持たない。單に一時的に苦痛を輕減するだけのことである。

第十六章　遺傳黴毒

遺傳黴毒は、時に先天性黴毒と稱せられるが、實は誤謬である。先天性黴毒とは、子供が生れた時既に黴毒の徴候、卽ち發疹乃至腫瘍を持つことを言ふのである。然るに遺傳黴毒とは、時日を經て(たとひ生れた時に建全であるとしても)、黴毒の徴候を現はすことを言ふのである。生後一週間で現はれることもあり、生後數ヶ月、又數ヶ年で現はれることもある。勿論これは兩親又は片親から感染したものである。然し兩親の黴毒に罹つた時と、子供の生れた時との距離が遠ければ、それだけ子供に及ぶ病毒は輕くなる。

既に述べた通り、遺傳黴毒を持つ子供は、其出生當時には極めて健全に見えるのである。然しそれが三週間の內に(或は三月位の間に)恐るべき病毒の徴候を現はし始める。先づ鼻口加多兒に苦しんで、特殊な嗄れた聲で泣き續ける。次には足底、手掌などに水泡を含んだ發疹が現はれる。足底や手掌などばかりでなく、次第に尻や肛門の周圍に現はれて、子供の全身は一

變する。色は蒼白くなつて身體は衰弱し、老人の小さな模型を見るやうな姿になる。嘗ては、かうした子供が忽ちの內に病毒に生命を奪はれて死んだものである。私に言はせれば、勿論早く死ぬる方が、子供の爲めにも又社會の爲めにも幸福だらうと思ふ。然し今日に於ては、幸か不幸か、特殊な醫學の進步に依つて、かうした遺傳黴毒の子供をも救ふことが出來る。

遺傳黴毒を持つ子供が、六、七、八歲位の年齡に達すれば、更に異つた徴候を現はし始める。

その徴候の中、最も著しいものは、上部中央の前齒數枚が刻み目を生ずることである。これは最初、ハッチンソン博士(倫敦に於ける著名な醫師)が認めた爲め、一般にハッチンソン齒として知られて居る。これはあらゆる遺傳黴毒の場合に現はれるといふ譯ではない。然し兎に角、此事實が現はれた以上は、黴毒の確かな證となるのである。ハッチンソン齒に次いで重大な徴候は、眼球の角膜炎症である。此結果は盲目となる。第三の徴候(但しこれは屢〻起るわけではない)は、突然聾になることである。八歲から十八歲

位になるまでの間に、突然聽覺に故障を起す、而して其結果、聾者となつて仕舞ふことがある。ハッチンソン齒と、角膜の炎症と、聾者と、これを遺傳黴毒の三特徴と稱してゐる。

遺傳黴毒を持つ子供は、他人の乳母などに育てさせてはならない、感染する虞れがあるからである。これは當然母親の育つべきものである。何故ならば、子供に其病毒を遺傳させたのは母親自身であり、且つ母親自身は實際病毒の免疫となつて居て子供から感染しないからである。

若し遺傳黴毒を持つ子供が、生前既に胎内で死滅したり、出生と同時に死滅したり、或は生後數月の間に病毒を現はしたりするものであれば、此遺傳黴毒の問題は比較的簡單である。黴毒の徴候を現はした嬰兒は、出生と同時に熱心に治療しなければならない。さうすれば病毒の爲めに死ぬるか、病毒を免れるか、兎に角一方に解決するだらう。然るに上述の通り、嬰兒は必ずしも出生と同時に徴候を現はさない。黴毒に罹つた兩親を持ちながら、十歳、十五歳、廿歳位まで、其徴候を見せない者もある。卅歳、四十歳になつて尚ほ見せないものさへある。而かも極めて健全に見えながら、突然、發疹や潰瘍を現はして、烈しい頭痛を訴へ、聾者になつたり狂氣になつたりする。それ故、若し子供に黴毒の有無が疑はしかつた時は躊躇せずに專門醫の診察を受けなければならぬ。時機を得た處置は、黴毒の徴候をある程度まで防ぐことが出來るのである。

黴毒に惱みながら子供を生んだ親は、必ず、其子供の血液檢査を行はなければならぬ。醫師から、黴毒は治癒した後だから大丈夫だと證明されたとしても、一應檢査する必要がある。幸にして今日は、子供が黴毒を持つて居るかどうかを明確に知る方法がある。昔は單に、其外貌に依つて判斷する以外に方法はなかつた。健康さうに見えて、病毒の外形的徴候さへ現はれて居なければ、其子供は遺傳を受けて居ないと診斷された。然るに現代では、ワッセルマン氏血液檢査の方法があつて、如何に外貌が健全に見えやうとも、病原菌の有無を直ちに知ることが出來る。

私は繰り返して言ふ。嘗て父親が病毒に苦しんだ場合、母親が病毒に苦しんだ場合(父母共に苦しんだ場合は勿論のことである)必ず其子供の血液検査をせよと。若しワッセルマン氏血液検査の結果、充分な反應があつたならば、其時適宜な處置を採らなければならない。凡ての人々が、かくすれば將來の不幸を幾分減少することが出來るのである。

私は、ある十五歳になる美しい少女のことを記憶して居る。彼女は常に健康で、若い女性の完全な典型であつた。然るに突然烈しい顔面神經痛を起して、鼻に辛痛を覺えた。彼女は近所の有り觸れた醫師の許に走つて、鼻に附ける軟膏を渡された。然し容態は其後急激に悪くなつた。腫瘍が口蓋に生じて鼻に及んだ。彼女が驚いて專門醫の許に駈け着けた時は、既にどうすることも出來ない程險悪な狀態に陥つて居た。柔い口蓋は潰れ、鼻は骨と肉と共に失はれた。其上に彼女は盲目にならなければならなかつた。彼女は現在義鼻を造つて慘めな生活をして居る。其心情は只だ諸君の想像に委せるだけである。彼女を最初に診斷した醫師は、其遺傳黴毒を

知らなかつた。誰も原因が黴毒にあるとは氣附かなかつた。然し專門醫だけは、彼女が父親から遺傳されたことを知つた。事實、彼女の父親は癲痺狂で既に死んで居たのである。

黴毒に惱んだことの一度でもある親は、必ず子供の血液を檢査せよ、而かも一度ならず數回に亙つて檢査せよ。——私は最後に更に繰り返して言つて置く。

第十七章　黴毒の處置

私は此書物で病氣の專門的療法を說かうとは考へない。疾病療法などと言ふことは、かうした書物の特殊な問題ではないと思ふ。其理由は、第一、手療法といふことは如何なる場合でも害あつて益がない、第二、覺束ない知識は、殊に藥劑に就いては、危險である。然し黴毒の處置に就いては、此處に數語を費して置く必要がある。世間には黴毒に對する水銀を無効として排斥する無智な醫師がある。而かも世人は種々にして、山師的醫師と科學的醫師とを識別しないで、此間違つた議論に影響される。其爲め、黴毒に惱みながらも、水銀を使用しない者がある。實に誤謬も甚だしい。それに對して私は是非言はなければならぬ。

黴毒に對する水銀の効果を非難する者は恐らく何事も知らないのであらう。過去にも現在にも、水銀は最も確實な黴毒藥である。然るに無智な醫師などは故意に、多くの黴候、卽ち發疹、潰瘍、脊髓病、痲痺狂などが、黴毒其もの、害毒ではなく、使用した水銀の害毒だ、と信じようとする。

然しそれは誤謬である。潰爛を生じたり、脊髓になつたりして、病毒の最も險惡な場合にも、嘗て其患者が一粒の水銀を用ゐたことがない――かうした事實は至るところに發見される。フォウルニエルは數百の實例を擧げて居るが、吾々も亦幾多の適例を知つて居る。而かも患者は水銀を用ゐて急速に恢復する、而して忽ち恐るべき病毒の徵候を減少する。――此事實がある以上、水銀の價値が有るか無いかは問題外である。

黴毒を持つた婦人の種々の姙娠過程を仔細に研究して見る時、更に水銀療法が特殊な効果を奏することが解る。婦人は元來黴毒に罹つて流產し易いものである。何等の治療をも施さないで置けば、幾度も續けて流產するか、或は死產をする、たとひ死產をしなくとも、生後數週間にして黴毒の徵候を現はす、然るにこれに水銀療法を行へば、忽ち著しい變化を起す。勿論流產をもしない、子供は健康體のまゝ、病毒の徵候を現はさない、一生涯現はさないこともある。

卽ち、水銀の價値を證明せよと言ふならば、先づ姙娠婦人に水銀療法の及ぼす結果を見るがいゝ、而して生れる子供の狀態を見るがいゝ。そこに領くに足るだけの變化を認めることが出來るであらう。

水銀療法に次いで價値のある黴毒療法は、サルヴァルサン、卽ち俗に六百六號と知られて居る藥劑である。サルヴァルサンは一部の過信家が稱する程に奇蹟的効果を奏するものではないが、兎に角現代で最も價値ある藥劑であらう。然し黴毒を療養するに、單にサルヴァルザン注射のみを以て安心してはならない、これは寧ろ水銀療法の補藥として用ゐるべきであらう。

サルヴァルサンに次いでは沃度劑(沃度加里(カリ)、沃度那篤(ナトリウム)など)がある。黴毒療法として今日用ゐられる藥劑中、重要なものは以上三種、水銀劑、サルヴァルサン、沃度劑である。各藥劑の川法は勿論素人の手に委すべきではない、專門家の熟練した手腕に俟たなければならぬ。

いふまでもなく黴毒を治癒するには、單に此藥劑療法のみではいけない。先づ患者の健康であることが必要である。其爲めには日常滋養物を攝取

し、常に熱湯に入浴し(殊に硫黃泉がいゝ)、新鮮な空氣を呼吸し、肉體的にも精神的にも過度の勞働を避けて、口と齒とを清潔に守らなければならぬ。(これは殊に大切なことである。)

若しこれ等萬事が感染した最初から申分なく行はれたならば、黴毒は決して處置するに困難な病氣ではない。其中で特に重大なことは、腫瘍の現はれると同時に一刻も猶豫しないで處置することである。只だ一日でも大切である。一年も二年も放擲して愈、烈しい潰瘍に襲はれてから、慌てゝ吾々の許に走つても、到底滿足な結果を望めるものではない、最初ならば容易に治癒すべきものも不治の難症となるのである。

患者は黴毒に感染したかも知れないと豫期しながらも、實際に醫師から其宣告をされると、强い激動を感ずるものである。其激動は恐らく嘗て經驗したことのない程烈しいものに違ひない。而して其後で患者の第一に質問することは、どの位治療すればいゝかといふことである。私も此質問

に度々出會つたが「必要だけの間治療なさい」――といふより外答へやうがない。

元來黴毒は、一定の期間を持つた病氣ではない。それ故、治療期間に就いて定則を設けることは出來ない。黴毒の輕重、患者の肉體、其年齢、其經濟狀態などに從つて、其期間も長く或は短い。同時に發病した二人が同時に治癒したといふことは未だ聞かない。或人にとつては、黴毒は比較的容易な病氣であり、或人にとつては不治の難症である。

現代では、概して昔よりも患者の治療期間が長くなつた。醫學の進歩した今日、治療期間が長くなつたと言ふは、一見矛盾のやうであるが、それには理由がある。

黴毒の外面的徵候を現はして居ない患者、昔ならば治癒したと稱せられる患者が、現代ではワッセルマン氏血液檢査の結果、尙ほ病原菌たるスピロヘータ・パリーダを持つことを發見される――其爲めに治療期間が長くなるのである。

普通の黴毒患者は、平均して三ヶ年を規則的な治療に費さなければならない、さうすれば大抵三年目には、時々治療を休んでもいゝ。然し第四年目、第五年目になつて、時々醫師の診察を乞ふ必要がある。若し一度黴毒に罹つた患者が、毎年一度づゝは醫師の許に通つて診察を受けることを定則にすれば非常にいゝと思ふ。若し患者に黴毒の再發する徵候があれば、醫師はそれを指示して、將來の憂を無くして呉れる。

ワッセルマン氏血液檢査。一般の人々、殊に黴毒患者はワッセルマン氏血液檢査を知つて、其効力に就いて常に間違つた考へを懷き易い。卽ち百パーセントの確實性を持つて居ると考へる。從つてワッセルマン氏檢査の結果、反應を示さなかつた場合は、凡て異常なしと認めて治療を中止する。然し實際はさうでない。勿論ワッセルマン氏檢査は、現代黴毒に對する檢査としては絕大な價値を持つて居る。然しこれを絕對的價値のあるものと認めるは稍、早計である。事實は八十五パーセントの確實性しかない、換言すれ

ば十五パーセントだけは不確實――病毒を持たない時に反應を示したり、病毒を持つ時に反應を示さなかつたりする。

それ故に、ワッセルマン氏血液檢査のみに依賴するは、非常に危險と言はなければならぬ。患者の血統、徵候、狀態等を合せ考へて判定する必要がある。熟練した經驗のある醫師のみが、此檢査の特殊な價値を適用し得る。

患者が適當な期間中、適當な療法を行つて、一定の年月の間、何等徵毒の徵候を現はさないで、且つ數回のワッセルマン氏血液檢査の結果、愈〻反應を示さなかつたとすれば、其時初めて全癒したと言へる。然したとひ全癒したとしても、尙ほ患者自身は周到に注意して、將來の爲め、一年に一度は醫師の診察を受けなければならぬ。

第十八章　軟性下疳

軟性下疳(硬性下疳、卽ち徵毒と區別する爲めにかく呼ばれた)は、通常生殖器に生ずる小潰瘍である。非常に烈しい傳染性を持つて、其膿汁が患者自身の皮膚又は粘膜の薄弱な部分に附着すれば、忽ち其處に他の膿疱(これはやがて潰瘍となる)を發する。然し徵毒性潰瘍が一個だけであるに反して、これは必ず數箇を生ずる、患者は大抵十、二十などゝいふ多數の潰瘍に惱まされるのである。

軟性下疳も亦特殊な病原菌を持つて居る。最初の發見者デュクレー博士とウンナ博士の名を藉りて、普通デュクレー・ウンナ菌と呼ばれる。然し、これは不潔物の中にだけ棲息する菌であるから、大抵最下等の娼婦のみが罹つて居る。男子でこれに罹るのは、さうした種類の娼婦に接觸する者のみである。

周圍の紅色を呈した黃色な點のやうな小腫物が、先づ發する。これが次

第に凸起して内面に膿汁を含んだ時、膿疱と呼ぶ。更にそれが潰れて血を含んだ膿汁を出し、潰瘍となる。指を以て其底に觸れて見れば、柔い感じがする。(黴毒の場合は上述の通り硬くして軟骨樣である。)

軟性下疳の潛伏期は極めて短い。感染後十二時間乃至二十四時間にして發する。(痲病又は黴毒の場合は、少なくも數日を要することは既に說いた通りである。)

軟性下疳は、全然局部的疾病で、黴毒のやうに他の諸組織に影響することがない。而して適當な治療方法を行へば、迅速に的確に治癒される。然し誤つて患者自身の手療治をしたり、無智な山師の手にかゝつたりすれば、次第に蔓延して遂には陰莖の一部分を失ふやうになる。私は嘗て、陰莖の殆んど全部を失つた患者を見たことがある。

軟性下疳を放擲して置いたり、誤つた治療を行つたりした場合、屢、横痃、卽ち鼠蹊腺の腫脹を生ずる。腺が軟かく膨脹して、其上部の皮膚は紅色を帶

びて來る。患者は其苦痛に堪へないで、殆んど歩くことさへ出來ない、而して時にはそれが潰れて膿汁を散らす。

若し患者が黴毒と軟性下疳とを、同時に感染したとする、其場合は非常に診斷が困難になる、何故ならば、たとひ腫物が軟性であつても、同時に黴毒と軟性下疳とを含むからである。それ故に、吾々は軟性下疳のあらゆる場合に(明らかに軟性下疳に相違ないと思はれる時でさへ)念の爲め、ワッセルマン氏血液檢査を行つて見る。如何なる場合でも、安全な策を採るに越したことはないからである。

軟性下疳に相違ないと診斷されて、後にワッセルマン氏檢査の爲め、或は黴毒性潰瘍となつた爲め、最初の診斷の否定される場合が往々ある。私自身もさうした多くの實例に接した。

容易に信ずる者は常に知識に乏しい者である。人間は知識が增せば增す程、愼重になり、獨斷に走らなくなる。花柳病に罹つた場合にとるべき吾吾の態度は、正に後者でなければならぬ。

第十九章　花柳病と結婚

昔は、麻病乃至黴毒に罹つても、若し外面的の徴候さへ消滅すれば、直ぐに結婚していゝと患者自身も考へ、醫師も考へて居た。麻病の膿汁、黴毒の潰瘍――それのみを恐れた。然し時代は變遷して今日に於ては、たとひ專門の醫師でなくとも、大部分の識者は進歩した考へを持つて居る。

ブリューの著 Damaged Goods 及び余の著 Never told tales は、かうした書物の最初のものである、而して幾多の講演や册子に依つて、一般の人々を注意するやうに教へた。其結果、世人は、外面的徴候の消滅した後にも、尙ほ其妻に感染することのある事實を知つた。

麻病又は黴毒が其妻に感染する危險を全然顧みない程の禽獸的人間ならば、どうにも仕方がない、然し大多數の人間は道德心を持つて居る、それ故、一度花柳病を受けた者は、權威ある專門醫から全癒したと許されない限り、何時までも危險を帶びて居る。――といふ事實を知つたなら、彼等大多數の

人間は、確實に治癒しようとしてあらゆる方法を試みる。從つて一度花柳病に罹つた人間が、如何に症狀が輕くとも、醫師の許に走つて檢査を受けることは、今日の人間にとつて普通のことであらう、檢査さへ受けたならば、彼が結婚してもいゝ狀態か、どうか、的確に解る筈である。

これには近道はない、どうしても經驗ある醫師の手に委して、其診斷を受け、其結果、一度花柳病に罹つた患者が結婚しても安全かどうかを決定する必要がある。場合に依れば、數回の檢査を經なければならぬ。而して其經驗ある醫師の意見には常に從はなければならぬ。かくして一度花柳病に罹つた者が凡て醫師に賴り、其意見を守つたならば、恐らく今後結婚した爲めの感染は絶滅するであらう。

麻病に感染した者が、所謂全治したと稱せられる爲めには、先づ左記の數ケ條を具へた狀態でなければならぬ。

(一)　全然膿汁を洩らさなくなつた狀態。

(二)　尿が完全に透明になつて、其中に何の細片をも含まなくなつた狀態。

(三)　攝護腺を摩擦して採つた其分泌液、精囊を壓搾して採つた其分泌液が、膿汁又はゴノコッケンを全然含まなくなつた狀態。これを確實にするには、時を變へて兩三回は試驗する必要がある。

(四)　尿道の狹窄、腫物等の消滅した狀態。

(五)　黴毒に對するワッセルマン氏血液檢査に似た痳病の血液檢査を行つて、其結果、反應のなかつた狀態。

但し此中、(一)と(二)との場合に反應する患者、卽ち小量の膿汁を洩らし、尿中に細片を含む患者を、時に依つて結婚してもいゝと診斷することがある。これは幾度かの試驗を經た結果、單に加答兒の徵候に過ぎないもので、痳病菌を全然持たないと證明された場合である。然しかうした場合は稀であるから、醫師は愼重にも愼重を加へて診斷しなければならぬ。

來る何日に結婚するといふ數日前に突然吾々を來訪して、檢査をして欲しいといふ者がある。診察の結果、結婚不可の狀態であるから、延期しては

どうかと忠告して見る。勿論、或者は此吾々の忠告に從ふが、或者は全然顧みないで結婚する。日取が定つて居るから變更されないとか、招待狀を出した後だとか、若し延期すれば何時までも厄介が續くとか、彼等は大抵そんなことを言ふ。私は勿論これに責任を持たないが、何かの方法を用ゐて、新婚の妻に、ある一定の期間中、病毒を感染させないやうにするがいゝと忠告する。其一定の期間中に患者は充分痳病を撲滅することが出來るからである。

黴毒が全治したと稱せられる爲めには、先づ次ぎの數ヶ條に相當しなければならぬ。

(一)　黴毒患者は、感染後少なくも滿五ヶ年を經過しなければ結婚不可である――私はこれを原則とする。但し單に五ヶ年といふ時日の問題のみで充分ではない。結婚してもいゝと言ふまでには、他に幾度の條件が控へて居る。

(二)　患者は少なくも二ヶ年乃至三ヶ年、系統的治療法を、專門醫に從つて

行はなければならぬ。

（三）少なくも結婚前一ヶ年間、黴毒の徴候、（皮膚又は粘膜の腫物、其他）を、絶對に現はさなかつたこと。

（四）ワッセルマン氏血液檢査を、四度三ヶ月間に行ふこと、而して特に治療して居ない場合に於ても、完全に反應を示さないことが必要である。

此四ヶ條に反しない場合は、兎に角結婚を許されていゝ。然し結婚許可を與へる際には、其新婚夫婦が、結婚後直ぐに子供を持ちたいと望んでゐるかどうかの點にまで觸れなければならぬ。若し直ぐに子供を持つだらうとの懸念のある時は、結婚許可の條件は更に嚴しくする必要がある。何故ならば、若し夫が皮膚又は粘膜の徴候さへ持つて居なければ、妻は姙娠するまでは感染しないものだからである。然るに姙娠すると同時に、胎兒を通じて病毒を感染する、而して勿論生れる子供も黴毒性を帶び易い。それ故、早く父親になるだらうと思はれる者には、特別に黴毒に對する條件を嚴にしなければならぬ。

第二十章　花柳病と醫師

私は既に數回に亙つて所謂山師的醫師に對する警告を述べて置いた。然るに此處に又特に一章を割いて、山師的醫師を非難しようとするのは、私の讀者に特別な注意と警戒とを喚起しようとするに外ならぬ。私は此問題を非常に重大であると考へる。勿論諸君にしても、山師的醫師の饒舌に親しめば、私と同感だらうと思ふ。

あらゆる種類の山師は、社會に對する曲者である。それ故、花柳病の山師、人類を滅ぼす山師的醫師は二重の曲者と言はねはならない。彼等は、患者の病毒を治療することの出來ないのみか、却つて惡くする。而して多くの場合、彼等はわざ々々苦て患者の持つて居なかつた疾病までを併發させる。單に患者の健康狀態を毀損するのみでなく、其精神を薄弱にする。生涯脫することの出來ない恐怖（而かも此恐怖には何の根柢もない）を與へる。其上、時には脅喝に類することを行ふ、患者から取れるだけの金錢を搾り取る。

――患者が花柳病又は生殖器病の公表されることを恐れる心理を見拔いて、惡辣な行爲をする。

彼等は、金錢の要求に冷酷なる者である。發表すると脅喝して金錢を貪る。私は數百の寒心すべき實例を知つて居る。其不誠實と、其冷酷とを知る爲めには、此處に僅々二三を紹介すれば足りるのである。

第一例。某青年外國人があつて、嘗て疫毒に感染したことはなかつたが、突然陰莖の上部に小發疹を發見した。青年は非常に驚愕して、先づ其處置に心を惱ました。たま々々新聞紙上の廣告に、あらゆる花柳病を數日間に全治し、且つ相談自由といふ「大專門醫」があつた。青年はそれを見て、早速其山師的醫師の診斷を乞ふた。山師的醫師は、青年を黴毒であると宣告し、即刻治療方法を講じなければならないと言つた。而して其爲めには先づ百五十弗を前金で納付するやうにと附け足した。生憎青年は百五十弗といふ大金を所持して居ない、手許には十弗しか持合せなかつたので、兎に角それだけを醫師に渡して、以後毎週十弗宛支拂ふやうに約定した。然し青年

は、醫師の許を去りかけて、ふと不審に思つた。醫師の態度を思ひ、其金錢に執着する點を思ひ合せると、非常に疑惑を感じないでは居れなかつた。彼は早速他の名醫の診斷を乞はうと決心した。

私が其青年を診察して見るに、何等黴毒の徵候は現はれて居ない。粉藥を撒布して僅に廿四時間の後に全治して仕舞つたのである。

第二例。痳病に罹つたと考へたある青年があつた。彼は數種の新聞に廣告して居る山師的醫師の診察を乞ふた。醫師は百弗を要求したが、前金として五十弗納付すればいゝと言つた。彼は三ヶ月間治療に手を盡した、而かも經過は良くならないのみか益、險惡に傾いて來る。其間に殘金の五十弗も醫師に渡したが、遂には尿が尿道を通過しない程に惡くなつた。彼は狼狽して、事情を友人に打明けて相談した。其結果私の診斷を乞ふことになつた。然るにこれは痳病ではなかつた。尿道の黴毒性潰瘍で、彼の全身には、至るところ黴毒の徵候が現はれて居た。勞働の結果漸く得た百弗の金錢を無益に費しただけの損失ならば、未だ諦めることも出來やう。然

るに此青年は貴重な三ヶ月間(此間に、適當な處置を缺いた爲め、恐るべき黴毒は益〻青年の肉身に喰ひ込んで居た)を無益に消費したのである。

單なる小濕疹を黴毒だと稱したり、其他かゝる手段は山師的醫師の常套手段である。若し諸君が、健康と生命と精神の平安とを尊ぶならば、必ず所謂山師的醫師の誇大な廣告に賴つてはならない。彼等は人類を救濟すると稱して、事實は人類を滅亡させるのである。

第三例。十七歳のある少年があつた。時々手淫を行つて居た。然し身心に何の異狀もなく頗る平安な狀態であつた。然るに不幸にも或山師的册子に書かれた誇張を讀んで驚いた。讀めば讀むほど怖ろしくなる。さうした不自然な事を繰り返して居る內、肺結核、貧血、癲癇、神經衰弱、狂氣などに襲はれる、「癲狂院には、此種の患者が充滿して居る」と、其誇張した書物には說かれてある。少年は更にこんなことまで敎へられた。手淫に耽つた人間が精力を失ひつゝある證據は、其尿である。尿を採つて數時間放擲して置けば、重い沈澱を生ずると。少年はそれを實驗して見た。成程、重い沈澱

が出來る。彼は殆んど死ぬ程に驚いた。然し、吾々の尿は(健康狀態にある人間の尿)數時間放擲して置けば、殊に冷たい場所に放擲して置けば、必ず重い沈澱を生ずるものである。此事實を少年は知らなかつた爲めに、山師的醫師を訪問して、數ヶ月の間治療を受けた。出來るだけの金錢を費し、兩親には盜まれたと欺いて時計を賣り、日常の食物を鵜呑みにして胃を弱めた。而して神經質になり、絕望的になり、憂鬱になつた。——かうした不良の狀態が數ヶ月續いた後、少年は眞面目な醫師の診斷を受けた。勿論山師的醫師の言葉は凡べて惡意ある誇張に過ぎなかつた。少年は眞相を初めて說明されたのである。而して彼は僅々一週間に以前と同じ快活な健康な少年となる事が出來た。かうした例は無數である。余は繰り返し注意と警戒とを與へたい。重ね々々山師的醫師の饒舌に欺かれてはならないと。

第二十一章　生殖器の小缺陷

包莖。包皮が龜頭を覆つて反轉することの出來ない場合に包莖と呼ぶ。先天的に包莖を以て生れる子供は、包皮を截去しなければならぬ。此手術は極めて簡單で、少しも危險の虞れがない。然し包莖の儘で放擲して置けば、龜頭と包皮との間に分泌する汚垢を堆積して、種々の疾病を釀し易い。或場合には砂樣の汚物を生じて、其刺戟の爲め交接を妨げる。包莖は時として痲病、黴毒、軟性下疳などを原因とするごともあるが、其場合は、非常に治療困難である。それ故、必ず包皮截去を行つて、將來の安全を計らなければならない。

箝頓包莖。これは包莖と反對の場合、包皮が龜頭頸の背面に固着して固く陰莖を束縛し、龜頭まで包皮を延ばすことが出來ない。此狀態も亦非常に危險である。龜頭は紅く腫れ上つて、適當な處置を施さなければ、陰莖壞

疽を起すことがある。而して局部の苦痛が甚だしく、排尿は妨げられる。然し幸にして經驗ある醫師の手術に俟てば、容易に截去することが出來る。

龜頭炎。龜頭の炎症は、多くの場合は、不潔の結果、殊に包皮の長大に過ぎ或は短小に過ぎる人間に多い。

其他包皮の炎症を起す場合もある、龜頭と包皮と同時に炎症を起す場合もある。以上包莖、箝頓包莖、龜頭炎の場合には、適當な時機に於て包皮截去を行へば、完全に其原因を除くことが出來る。これ等種々の場合を考へ合せたならば、何人も、かの古代に於て包皮截去(卽ち割禮)を男子に悉く强制じた立法者が、實に完全な衞生家であつたことを認めるであらう。單に猶太人乃至回々教徒の一部分のみでなく、他の諸國に於ても多數の割禮實行者を出したといふ事實は、此方法の衞生的價値を廣く一般が認めて來たことの證とも言へると思ふ。

腺炎。淋巴腺炎(鼠蹊腺炎、横痃)。麻病、黴毒、下疳等の難症となつた時、殊に患者が過度に動いたり物を持上げたりした時、鼠蹊腺が炎症を起して腫脹することがある。腺炎、鼠蹊腺炎、横痃などゝ呼ばれるものはこれである。但し横痃は、黴毒又は軟性下疳の爲めに屢〻起るもので、麻病の爲めに起るは稀である。

勃起苦痛。麻病患者にあつては、尿道の充血と刺戟との爲め、不時に勃起することがある。且つ何時までも勃起して居て萎縮しないことがある。これは患者に有害であり不快である。單に夜間丈け勃起するといふならば未だしも、晝間にも屢〻起る。これは非常に苦痛と言はなければならぬ。晝間に絶えず勃起して、而かも萎縮しないとすれば、患者は周圍に對して非常に氣まづい位置に立たなければならぬ。

夜間の勃起は大抵夢精を伴ふ。其夢精は極めて緩慢で、精液が徐々に滲み出す。其爲めに尿道の炎症は、更に險惡に陥つて仕舞ふ。勃起は屢〻麻病

の經過を不良にして治療を妨害する。從つて所謂いたちごつこをする結果となる——卽ち麻病が勃起の原因となり、勃起が更に麻病を障害する。

陰莖の勃起した時に、下方に曲る者がある。其苦痛は實に想像以上である。取返しのつかぬことだとは知りながら、陰莖を臺の上に載せて本人が、急に打擊を加へる程、其苦痛は甚だしい。勿論そんな亂暴なことをすれば同時に陰莖をも破壞し、尿道をも破壞する。出血を伴ひ、尿道狹窄となる。然しそれ等(勃起苦痛及び勃起彎曲)は全部麻病から生じた結果とは言へない。他の炎症刺戟に生る場合も亦多い。强壯な人間が長く禁慾したゝめに起ることもあり、時には原因の不明の儘起ることもある。

第二十二章　生殖器の疱疹

疱疹は生殖器に生ずる寧ろ有り觸れた病氣である。最初は數箇の小水泡の腫物が皮膚に出來るが、やがて潰れて擦り剝けた痕を殘し、或は乾いて暫時の後には消滅する。只だそれ丈けの者である。それは大抵、不潔に原因するが、必ずしもさうとは言へない。常に生殖器に注意して清潔を守つて居る人にも生ずることがあるからである。さうした場合は、何か神經の障害だらうと思はれる。或人は、或種の婦人と接觸すると必ず疱疹を生ずるが、他の婦人と接觸した場合は些の影響もないと言つた。勿論それは輕症で、放擲して置いても消滅する、僅に數時間、遲くとも數日の間に全治する。然しこれを特に此章に說かうとしたに就いては二箇の理由がある。

第一、疱疹の水泡が破れて擦り剝けた皮膚の痕を殘した場合、往々にして軟性下疳又は黴毒に感染し易いからである。擦り剝けた皮膚は、如何なる場所にあつても、黴菌の侵入口となるものである。それ故、疱疹其ものは注

意するに足りない程の輕症であるが、他の病毒感染の虞れをなくする爲めに輕視することの出來ないものである。

第二、疱疹の生じた場合、多くの患者は、花柳病に罹つたのではないかと想像して恐怖するからである。而かも不幸にして其患者が、かの山師的醫師を頼つて相談したとする。勿論醫師は患者の恐怖に更に輪を掛けて誇張するに相違ない。此何でもない小腫物を、黴毒だの下疳だのと言つて、長く治療しなければならぬと申渡すに相違ない。私の知つて居る範圍でも、疱疹を軟性下疳だと診斷した山師的醫師が無數にある。然し乾かす爲めの粉藥を撒布すれば、容易に全治するものである。患者は此點に注意して狡猾な醫師の甘言に乘つてはならない。

丘疹。時として生殖器に苦痛のない小丘疹を發することがある。これは殊に包皮の長大に過ぎる者、常に生殖器を清潔にして居ない者には發し易い。花柳病に嘗て感染したことのない者にも見受けるものであるが、同

時に屢、麻病の膿汁、下疳、黴毒などの原因から發する。然し難症といふわけではなく、處置さい適當にすれば數日間にして全治する。只だ放擲して置けば次第に大丘疹となるが、それさへも外科の手術を以て截去するか、燒くかすれば容易である。成るべくならば小さい内に清潔にして、蒼鉛などの粉藥を撒布して置くがいゝ。さうすれば後になつて厄介を免れる。

尿道炎（麻病でない場合）。世人は大抵、尿道から出る膿汁は凡べて麻病に依るものと考へて居る。然しそれは眞相を誤つた考へである。麻病菌、即ちゴノコッケンを含まない膿汁も隨分ある。單に加答兒の場合も多い。而して勿論加答兒の場合ならば、容易に確實に治るのである。然るに世の中には、此全然麻病菌を含んで居ない加答兒に罹つて、それが忽ち全治した事實を見ながら、難症の麻病が三日か四日かで全治した、と考へて居る者がある。

膿汁は、其他強烈な注射をした爲めに起ることもある。此注射といふのは、麻病の豫防として交接後に行ふ注射の意味であるが、若しこれが強烈に過ぎた時は、反對に膿汁を起すのである。（勿論これは麻病の膿汁ではない）然るに患者は、豫防注射も效がなくて麻病に罹つたのかと疑ふ。かくした場合は、凡べて膿汁を取り、顯微鏡下に見れば、忽ち氷解する。肉眼で見たのでは、其差異を認めることは出來ないのである。それ故若し尿道から膿汁の滲出することがあれば、直ちに顯微鏡下の試驗をして貰はなければならぬ。而して麻病であるが、加答兒に過ぎないか判定した後、適當な處置を取らなければならぬ。

精巣の周圍にある小囊に、水樣の血漿が滲出して膨張する場合がある。これも全然放擲して置けば次第に大きくなる。然し難症ではなく、容易に治るものである。甚だしくなつた時でさへ、簡單な小手術を行へばいゝ。然し時に依れば、其膨脹が精巣を壓迫して、其機能を妨げることがないでもない。

第二十三章　急性攝護腺炎

急性攝護腺炎は不幸にして多くの場合痲病を併發するものである。最も頑固な慢性痲病は大抵これの爲めに生ずる。たとひ痲病にしても、攝護腺に影響しない場合は、比較的容易に治療される。それは尿道だけならば、充分に藥劑を適用することも出來るし、又最近では、ゴノコッケンを其隱れた場所から誘引して消毒することも出來るからである。然し一度ゴノコッケンが攝護腺中に侵入すれば、右のやうな簡單な療法を用ゐることが出來ない。即ち直接藥劑を攝護腺に適用することが出來ない、從つて殆んど全治の見込が立たないのである。リコードは嘗て「痲病に罹つた時、只だ神だけが、何時治るかを知る」と言つた。これは恐らく、攝護腺に侵入した場合のことを言つたのであらう。

徴候。急性攝護腺炎の最初は極めて徐々として來る。それ故患者自身は、實際上何の徴候をも感じない。或は多少感じても痲病の爲めに起つた

徴候だと認めるに過ぎない。先づ直腸と生殖器との中間の部分に著しく不快を、――重い、曳きづるやうな感じを受ける。坐ることが困難になり、歩くと大股になる傾向がある。直腸に強い壓迫と熱とを感じ、時には惡寒を感じる。症狀が甚だしくなれば、體溫が急に華氏の百三度から百四度位に昇る。患者は便秘して、腸を動かせば非常に苦痛を覺える。尿道から出る膿汁は時として全然止まる。直腸又は攝護腺にあたる部分に指を觸れても堪へ難い辛痛を受ける。排便は困難になり、排尿は屢〻閉塞する、閉塞しないまでも苦しい。外界から壓迫する刺戟に依つてのみ苦痛を覺えるのでなく、內部から自發的の苦痛が湧き起る、患者は醫師の許に駈けつけ、時にはモルヒネの痲醉を要求する程である。而かも次第に苦痛は局部的でなくなる、龜頭、精巢、股のあたりにまで波及して來る。

かうした狀態が數日間持續すれば、何れにしても次の三過程を辿らなければならない。

(一) 完全に治療する。即ち局部の炎症が消散して、全然苦痛がなくなつ

て仕舞ふ。

(二) 膿腫に變化する。

(三) 徐々に慢性攝護腺炎となる。

以上の內、(一)と(二)とに相當する場合は稀で、大抵は(三)卽ち次章に說く慢性攝護腺炎となるのである。

膿腫に變つた時は、攝護腺の熱は高くなり、苦痛は增して來る。排尿の困難、頭痛、渴望などを覺え、全然尿の閉塞を來すこともある。

膿腫は尿道內に破れたり、直腸內に破れたりする。前者の場合は血液を混合した多量の膿汁を排出する。而して徵候の凡べては直ちに止むものである。それ故膿腫が、一日二日經過しても破れない場合は、醫師の手に依つて、直腸を通して攝護腺に手術を加へるといゝ。

第二十四章　慢性攝護腺炎

慢性攝護腺炎は極めて普通の病氣である。現代の所謂文明國の男子は症狀の難易の差こそあつても、大部分、此病氣に罹つて居ると認められる。

原因。慢性攝護腺炎の原因の最も主要なものは痲病である。痲病は急性攝護腺炎の場合には殆んど全部の原因となつて、其他は單に從屬的の原因となるに過ぎない。然るに慢性攝護腺炎には、(勿論上述の通り、痲病が最も主要な原因には相違ないが)同時に他の重大な原因がある。それは手淫、房事過度、絕對の禁慾、充たされざる興奮(これは精神的肉體的共に)、長い蟄居的生活、尿道狹窄、惡寒などの類である。

痲病、或は尿道炎などを原因として起る慢性攝護腺炎は、最初から慢性の徵候を現はす場合もあり、又急性攝護腺炎の結果として起る場合もある。

徵候。慢性攝護腺炎の徵候は種々あつて、極端に輕いものと極端に重いものとがある。時には全然徵候のないこともある。

局部的徴候は試驗の結果認められる。通常は、攝護腺が膨脹、柔軟、潤濕の傾向を帶びて、壓迫に對しては敏感となる。而して濁つた重い分泌液を、表面に滲出する。

感覺的徴候は、攝護腺及び其附近に感ずる苦痛と、肛間及び其附近に感ずる痛痒とである。

更に最も屢、起つて、最も患者を惱ます徴候は、腓に重い倦怠、足底に強い燃燒を覺えることである。排尿の度數は頻繁となつて、殆んど毎一時間、或は二時間毎に厠に立つ。殊に麥酒などの刺戟的飲料を取つた時には十五分毎、或は二十分毎に催す。夜間睡眠中でも一度乃至四度は起きなければならぬ。

性的徴候は、勃起の不完全になることゝ、早漏になることである。

一般神經的徴候は極めて多い。先づ第一には感受性(肉體的にも精神的にも)が病的に強くなる。患者は體溫の變化に依つても影響される。些細な事柄に當つて挫ける、而して概して沈鬱である。此沈鬱の爲めに、患者は

仕事に對する希望を失ひ、事物に對する興味を失ふ、其結果は絶望となる。深い憂鬱に閉されて、遂には自殺しようかと眞面目に考へる樣になる。此狀態が持續すれば、勿論性的神經衰弱となるより外に道がないのである。

慢性攝護腺炎は、勿論放擲してはならない。直ちに醫師(決して山師的醫師を信賴してはならぬ)に相談して、適當な處理を加へる必要がある。

第二十五章　攝護腺の膨脹

攝護腺の膨脹は難症であるが、四十五歳以上の者、殊に五十歳、五十五歳にも達した者にあつては、普通に見る痲病である。年少の者には殆んどないが、老境に近づいて發する。然し、其膨脹する原因は未だ明言することが出來ない。臆測としては種々の說がある。例へば、これは手淫、痲病、房事過度などに依つて起るといふ。(著名な醫師の中にも此說を採る者がある)然しこれは誤謬である。何の根據もない。百人中、九十五人は少なくも一度以上の手淫に耽つて居るのであるから、攝護腺膨脹に罹つた大多數の中にも亦、手淫の記錄を發見する。――これは當然のことで、手淫と攝護腺の膨脹との間に密接の關係があることにはならない。盲者、聾者、傴痲質斯患者、手足の不具者などの中にも、手淫の記錄は殘つて居やう。然しこれは手淫を犯したから盲者や聾者や傴痲質斯患者や不具者やになつたといふことにはならない。單に百人中、九十五人が手淫に耽る事實があるから、かうした

結果が生じたゞけである。

痲病と攝護腺の膨脹との關係を說くことも亦誤謬である。何故ならば、幾千の人々、嘗て痲病に罹らない人々がこれに罹つて居るし、反對にこれに罹らない幾千の人々が痲病に罹つて居るからである。

房事過度も亦原因とはならない。多くの人々、所謂房事過度に生活を送つた人々が、老年になつても攝護腺の膨脹を起さない。反對にカトリック宗の僧侶などの禁慾的生涯を送つた人々が罹ることもある。

要するに、現代に於ては、此眞の原因を知ることが出來ない。何人も確實ではない。私は根據のない臆說を主張するよりも、寧ろ吾々の無智を告白する方がいゝと思ふ。

徵候。膨脹の程度と膨脹の方向とに依つて、徵候は一樣でない。膨脹の方向が直腸方面に向つて居るか、膀胱方面に向つて居るかに依つて、輕くもなれば重くもなる。

患者に最初氣の付く徵候は、(而して此徵候が現はれて初めて醫師の診斷

を乞ふ)排尿の故障である。先づ尿が薄くて弱い、而して頻繁である。ある場合には、十分毎、十五分毎に排尿する。夜間でも數回は起きなければならぬ。此狀態の頃には、尿道の閉塞を來して、導尿管を用ゐなければ排尿が出來なくなる。次には多くの場合、烈しい膀胱加答兒を起し、遂には輸尿管を通じて炎症が腎臓に及び、所謂腎臓炎を併發するに至る。

以上の單に泌尿器的徴候の他に、幾多の徴候が現はれて患者を惱ます。卽ち、精力は一般に微弱となり、勃起は障害を起し、射精は早漏となる。而して患者は激し易くなり、仕事に不熱心になり、落付かなくなり、膀胱加答兒以外の何かに苦しめられて居るやうに見える。或は攝護腺其ものが、何か有毒な物質を生ずるのではないかと思はれる。其有毒な物質が血液の中に吸收されて、種々の徴候を現はすのではないかと考へられる。

若し患者が最初の徴候を發見した時、直ちに醫師の診斷を乞へば、恐らく難症に陷らない内に苦痛を除くことが出來る。然し殆んど凡べての場合、患者は時機を誤る。其爲め導尿管を用ゐて人工的に排尿させるか、手術に

依つて攝護腺を除去するかより他に方法がない。

導尿管は、單に一時的緩和の方法として有效であるに過ぎない、而して導尿管を用ゐなければ排尿の出來なくなつた患者は、二三の例外を除き、早晩二三年内に死ぬのである。

攝護腺を除去することは極めて危險な手術であるが、熟練した醫師ならば困難ではない。(但し此手術の爲めに死亡する者も稀にはある)然し要するに、攝護腺の膨脹が難症となつた場合、若し患者の他の部分さへ健康であるならば、思切つて手術を行ふべきである。他には方法がないからである。

第二十六章　靜脈腫

靜脈腫は、所謂山師的醫師の商賣上の重要なる項目を占めて居るものであつて、此處に短い一章を設けることも、無益ではあるまいと思ふ。

靜脈は往々にして腫脹することがある。吾々の肉體中、充分に保護されないで露出して居る手だの足だのには、屢〻見る現象である。

これと同じ現象が、精巢の周圍にある靜脈に就いても言はれる。卽ち精靜脈の腫脹を、特に靜脈腫と呼ぶのである。勞働に從事する人、重量を揚げ下げする人、一日の大半を徒步する人などが、特にこれに罹り易い。然しこれは輕症の時には殆んど何等の徵候をも現はさない、而して何等不良の結果をも生じない。一般に筋肉組織を緊脹させること、冷水浴をすること、冷洗滌液で生殖器を洗ふこと、適當な陰囊繃帶を施すことなどが必要である。

輕度の靜脈腫ならば性的精力に少しの影響をも與へない。但し患者が似而非學者の著書を讀んで、自ら不安になつた場合は別である。彼は精神

上の不安から性的不能となるかも知れない。

然し靜脈腫が難症となれば、有害の結果を起すのである。局部に重い感じを覺え、交接を妨害することもある。此時の處置としては、外科の手術に依つて靜脈腫を截ることが最上である。

第二十七章　副精巣炎

副精巣炎は副精巣の炎症である。副精巣は精巣の背部に密接して精液を精巣から輸精管に導く器官である。

副精巣炎はすべての場合、痲病から併發するものであつて、患者は萬事に不自由を感じる。例へば歩くこと、持上げること、働くこと、舞踏すること、飲酒すること、交接することなど凡べて禁じなければならぬ。若し經過が悪ければ、種族の承續の不能、即ち生殖の不能に陥るのである。殊に、男子の痲病を種族的疾病としたものは、此副精巣炎である。若し痲病に副精炎といふ併發症がないとしたならば、痲病は單に個人的疾病(勿論汚穢、苦痛、危險な疾病には相違ないが)たるに過ぎないであらう。種族の繁榮をも妨害することはなかつたのである。然るに副精巣炎の爲め、幾千の人々が凡べて生殖不能に陥り、(即ち婦人を姙娠させることが出來ないで)人類の繁榮に影響を及ぼし、ゴノコッケンが種族の上に猛威を振ふ。其結果、痲病が社會的、種族

的疾病となつたのである。

徴候。副精巣炎の徴候が現はれたならば、患者は直ちに知ることが出來る。鼠蹊腺に烈しい苦痛を覺えるので、數時間前に豫知することさへもある。副精巣が腫脹して來れば、苦痛は更に烈しくなつて、患者は殆んど歩くことも出來ない。不快を覺えると同時に熱が高くなつて、華氏百四度位に昇る。從つて病氣に罹つたことを患者は容易に知るのである。

副精巣炎が輕症の場合には、全然歩けない程ではないが、一歩々々に苦痛を伴ふ。其上、陰嚢に重い曳きづるやうな壓迫を感じる。時には氣絶するのではないかと思はれる。更に嘔氣を催したり、痙攣を起したりする。

副精巣炎は通常一面だけであるが(即ち片側の副精巣にだけ炎症を起す)兩面に起ることも多い。然し兩面の副精巣が同時に炎症を起すことは稀である。何れかゞ必ず數日を先んじて起るものである。

副精巣炎に附隨して起る奇異な現象がある。それは痲病の特徴たる尿道の膿什が全然出なくなることである。膿什は依然として多い筈である

が、副精巣炎を併發すると同時に、時としては數時間以前に中絶する。然し副精巣炎が全治すれば、再び以前と同樣の狀態となる。

副精巣炎が化膿に終ることは殆んど稀である。然しこれが屢、ある物質を殘して、其爲めに副精巣の頭部と尾部とが硬化して、輸精管へ導く精液の故障を來すのである。此狀態が、若し兩面の副精巣に及べば、患者は生殖不能とならなければならない。而して、事實、副精巣炎はすべての場合、副精巣を硬化させて居る。それ故に醫師は、副精巣の頭部乃至尾部の硬化して居る事實を知つて(たとひ外面的には徴候が現はれて居なくとも)其患者が幾年前(二十年以前にしても三十年以前にしても)痳病に罹つて居たかを推知することが出來る。

片面だけの副精巣炎に罹つた患者の中で、百人中、二十人は生殖不能となる。兩面共に副精巣炎に罹つた患者は、百人中、四十人乃至四十五人が生殖不能となる。

上述の通り、副精巣の硬化は生殖不能の結果を導く。或場合には絶對に

精液を通過させない。それ故、去勢された人間と何の異るところもない。又或場合には小量の精液が通過して輸精管に流入する。然し含まれた精子は、少數であつて而かも不健全である。勿論卵子を姙娠させる能力は持つて居ない。然し此患者は、生殖不能になるが、交接不能となることはない。(此事實は不思議と言へば不思議である)精力も減少しないし、快感も減退しない。其他一般の肉體的組織には全然何の影響をも與へない。單に局部的の疾病である。

精嚢炎。これは精嚢の炎症で、一箇の場合と二箇の場合とがある。原因は主として痳病、殊に痳病感染中に交接することに依つて起る。

此徴候の最初は、急性攝護腺炎の徴候と殆んど區別し難いが、次の一點だけは、著しい特徴である。即ち精液中に血液又は膿什を含んで居る。而して急性の場合、患者は嘔氣を催したり卒倒しかけたりする。

痳病は、以上に說いた種々の場合の外、直腸にも感染し、口にさへ感染することがある。

第二十八章　尿道狹窄

尿道狹窄は、尿道の口徑が狹窄し或は收縮したものを言ふ。原因は痳病又は他の尿道炎症である。症狀は排尿の困難になることである。輕度の尿道狹窄ならば、擴大膨脹させることも出來るが、難症となつては、截去するより方法がない。

徵候。最も普通の徵候は所謂後痳、卽ち小量の尿道膿である。此膿は朝だけ現はれるものと一般に考へられて居るが、それは單に、患者が夜間の長時間を排尿しないで睡眠するから、朝になつて氣付く程に溜るのである。晝間でも、若し患者が八九時間の排尿を强ひて堪へて居れば、勿論朝と同樣の膿を發見する筈である。

第二の徵候は、尿流の形狀と性質とが相違することである。先づ形狀は平生よりも細小となり、方向は一定しなくなる。一方に走つたかと思ふと忽ち下方に變じる。而して二方、三方に分れて走ることが普通である。

次には尿が常に數滴宛洩れて來る。而して最後には全然排尿が出來なくなる。一滴の尿も尿道を通過しない。

尿道狹窄の生殖器的徵候は更に重大である。何故ならば上述の泌尿器的徵候よりも一層患者を惱ましく苦しめるからである。先づ勃起不完全又は勃起微弱、早漏、交接中の快感減少、射精中の尿道炎燒などを起す。而して大抵は性態の消耗を來すが、時として、尿道の背部又は攝護腺の周圍に炎症を發して、患者を非常に刺戟する。其刺戟の爲めに、患者は常に性慾の衝動を受けて居ると想像する。然しこれは單に想像的感覺に過ぎない。實際に於ては性的不能に陷つて居るのである。かうした場合には、一方夢精にも屢〻襲はれる。而かも精液を膀胱に向つて射出する變態を來すこともある。

第二十九章　僂麻質斯

麻病の爲めに生じた關節炎、卽ち關節の炎症は、必ずしも屢〻起るものではない。これが起るは、僅に百人中二三人の割合に過ぎない、而して婦人よりも男子に多い。生殖泌尿器の周圍に影響した麻病は、大抵關節炎の傾向を帶びるが、殊に攝護腺炎及び精囊炎の場合にそれが多い。

關節炎は、其犯される場所に依つて名稱を異にする。膝關節炎、踝關節炎、腕關節炎、指關節炎、肱關節炎、其他肩、腰、顎などに依つて夫々の名稱がある。其中、最も多く見るものは膝關節炎で、優に他の關節炎全部に匹敵する。

第三十章　眼麻

眼麻、卽ち眼球に麻病の感染したるものを呼んでゐる。それは主として直接、指の接觸に依つて惹起される。或は汚れた手拭などの器具を媒介とする。初生兒の眼麻は、麻毒を持つ母親の產道(膣乃至陰門)を通過する時、直接病毒が眼球に侵入するために惹起される。激烈なものになると、既に母親の子宮內にて眼麻となり、爲めに角膜が離れて生れる、或は全然盲目となつて生れるが、幸にして後者の場合は比較的稀有である。

豫防。豫防法は(若し豫防法があるとすれば)寧ろ治療法よりも大切である。私は從來機會のある每に、青年に敎へて、眼麻の恐るべきことを說いた。不注意は眼麻に感染する基であること、其注意すべき點は何かといふこと、生殖器に觸れた手は、如何なる場合でも直ぐに洗滌しなければならぬといふこと、――幸にしてそれ等のことは、麻病患者たる彼等青年がよく守つて呉れた。恐らく諸君も守つて呉れるに違ひない。人間にとつて、狂人にな

ることを除けば、盲目になること程、恐怖すべきことはないからである。

現代の文明國(眞に文明か否かは疑はしいとしても)に於ける盲者の約三分の一は、眼痲の爲めの盲目であると言はれる。此統計は恐らく正しいであらう。それ故、眼痲の害に就いて今更力說する必要もなければ、論議する必要もない。從つて其豫防法は更に重大なものとなり、殊に分娩の期を控へて居る兩親の責任は重大となるのである。若し母親にして痲病に感染したならば、常に無刺戟の消毒液を使用しなければならぬ。而して若し膿汁が白帶下の中に含まれて居るのを發見したならば、早速相當の處置を加へなければならぬ、それが又感染の媒介となるからである。

初生兒の生れた際は、先づ第一に其眼に注意する。若し分娩前の母親が何等の病毒を持たなかつた場合には、單に、二パーセントの硼酸水にて初生兒の眼を拭へば充分である。然し母親が痲毒を持つて居ると解つた場合(或は疑はしい場合)には、硼酸水の豫防のみでは足りない、兩眼共にゴノコッケンの殺菌となる溶液を注入しなければならない。クレーデ教授は、其點に關

して人類の大恩人と稱していゝ。彼の研究と發明との爲めに幾千、幾萬の嬰兒が、盲目となるを免れて居る。クレーデ教授の發明とは、初生兒の生れると同時に、其兩眼に二パーセントの硝酸銀水を各眼に一滴づゝ點づることである。多くの場合には一パーセントの溶液で充分である。

眼痲の診斷は極めて容易である。先づ最初は眼が充血して眼脂を多く生じる、次には化膿して來る。腫脹して、上下の眼瞼が膠着する。其爲めに眼を開く前に水で濕したり、揉んだりしなければならぬ。

かうなれば一刻も猶豫してはいけない。一分一秒の時も貴重である。初生兒の眼に僅かの充血、僅かの炎症をでも發見した時は、何を措いても名ある醫師の許に診察を乞はなければならぬ。一刻遲れゝば一刻の損失である。

後天的に眼痲となることも亦屢、見るところであるから、器具、手巾、手拭などに特別の注意を拂ひ、多少でも眼球の充血を覺えたならば、早速、適當な處置を講ずべきである。

第三十一章　禁慾

人間は、其肉體的、殊に經濟的、精神的の生活に影響されて、各種問題を、冷靜に公平に思索することの出來ないものである。少なくも現代の大多數の人々はさうである。彼等の傾向は、常に偏狹になり、極端になる。結論が如何になるか、それを全然恐れないで、飽くまでも、眞理の追求に從ふ者が、果して幾人あるであらうか。大抵の者は、結論を豫想して孤疑逡巡する。或は偏狹になり極端になる。此態度が、殊に性慾作用に關しての論議には著しく目立つて居る。

性慾の放縱及び性慾の節制――此相反する二箇の論議は、非常に差異ある距離を示して居るが、これには原因がある。原因の第一は、論議する人間の性慾如何である。第二は、一方に於ける極端な放縱生活と、他方に於ける宗教的社會的習慣との矛盾である。

第一。旺盛な性慾衝動を持つ者と、交接不能、或は性的に缺陷を有する者

との間には當然性慾問題に關する態度の相違がある。

第二。性慾は本能であるが、其滿足は、教會の教義、法律の條文、社會の風習と一致しない。然るに性慾以外の人間の本能、例へば飢渴の本能、睡眠の本能などの滿足は、決して社會から非難されない。只だ性慾の場合だけが非難されるのである。其結果吾々は矛盾した二箇の意見に分離して仕舞ふ。即ち、第一の意見を懷く者は常に性慾を開放して、何等宗教上の教義を認めない。而して「性慾の滿足は自由なるべきであり、他の人間本能(睡眠など)と同樣に考へらるべきである」と主張する。それ等論者の中には、極端な思想を懷く者もあつて、「性慾は人間固有のものである。それ故、性慾の眠覺めたと同時に、(即ち十四歳乃至十六歳位)開放して何等の害も生じないのだ。」と主張する。「人間は、此春機發動期に性慾を開放すれば、有害な手淫を免れ、夢精を免れ、其結果、性的に一層健全な者となる。」と主張する。

第二の意見を懷く者は、第一の性慾開放論者よりも遙かに多數であるが、勿論それは自然なことである。彼等は、奇特な目的、即ち青年を不義の性的

關係から救ひ、花柳病の危險を防ぎ、宗教や道德を破らせまいとして、種々の主張をする。彼等は性慾の力を縮小しようとする、意義を認めまいとする、而して時には「性慾の必要」をも否定しようとする。彼等の意見に從つて言へばかうである。――既婚者が性慾を滿足させるは當然であるのみか、寧ろ有益である。然し未婚者が性慾を滿足する必要は少しもない。たとひ三十歲、四十歲になつても、未婚者である以上は、禁慾すべきである。而して勿論、人間は其生涯を禁慾のまゝで過していゝ、決して有害な結果は生じない、肉體的にも精神的にも、健康は維持される。――彼等はかう主張する。彼等の中には、絕對の禁慾が無害であるとは信じない者もある。然し社會に發表する意見としては、不正直な方が安全だと考へて居る。

著者は極端論者ではないが、眞理を述べることが、永久的には最上の策だと信じて居る。それ故に、此處に說くことは、禁慾と性慾の必要とに關する眞理である。性慾は人間の所有する本能の中、飢餓に次いで强烈な本能である。而して勿論自然な本能であるから、青年が異性に强い執着を覺える

ことは、何等不面目なことでも恥づべきことでもない。健康が不面目でないと同じく、性慾も不面目ではない。然し、吾々は私人として生活して居るのでない、現代の吾々は所謂文明なるものゝ中に住んで居る。但し此ことは現代の文明が誇るべきものか否か、とは別問題である。今日歐洲に蔓延した無意味な殺戮(歐洲大戰)は、現代の文明が、其根柢に於て一個の野蠻人にも優つて居ないことの證據である。然し、兎に角吾々は、所謂文明の中に住んで居る。而してたとひ吾々が文明の命令を輕蔑し、文明の制限を拒絕しても(又、文明は、其輕蔑と拒絕とに相當して居るとしても)同時に吾々は、此文明(卽ち社會)に幾分かの貢物を捧げなければならない、若しそれを爲なければ、社會の非難と反感とを買ふのである。それ故、私は宗教的、又は道德的意味で言ふのではない、單に青年自身の利害問題から言ふのであるが、少なくも二十歲或は二十二歲以前には、性慾を放縱にしてはいけないと思ふ。

性慾が餘りに早く眼覺ることは實に不幸といはなければならぬ。現代の社會標準乃至經濟狀態から觀察するに、男子は十歲前後に覺える筈であ